夕霧里

二十三

哥を名とせり

[v.39]

PL788
.4
.G4
1654
vol.39
Copy1
Asian
Japan
Cage

2004551302

[illegible]

まめ人のな[illegible]さしがりぬふ大[illegible]一条乃
家のれありさ[illegible]と[illegible]ありまほしと心にとゞめて
[illegible]の人[illegible]はむかしをますれぬよういり
こきつゝいとわんじにとふしひきてし給ふるの
心にはかくてはやむまじくなん月日にそへて
[illegible]まさり給けるこやまゝ[illegible]もおもれにきがらさ
れこゝろぶ人にもあるれといまはいにくもれ
さびしさ[illegible]つれぐをこゝぞをとづれ給ひ
なぐさむることゞもおほりおとゞめりけさう
ひても[illegible]給はざりしにひさ人しけさうぶらこ
な[illegible]めんもまばゆし[illegible]ゆきこゝろざしを

えしなりて、うちとけ給ひもあらじやいとむ
つゝさるべきことまつけても、宮(後案)のれけひ事程を
ミのふ、こゝろしなどこさてし給ことハさしまなし。
いかなしんつゐでに、むことをもまほに望しむし
まて、人のれけしひをえとおぼしつゝるに、宮(地)すぐ
地のけまいたうつゞしひまて、小野(扶川の慕之)といふつゝるに。
山ざとまさまへるにつゝりまへり、さやうより(此自然)れ
いのりの師まて、地のけなどちしひすてなる、(誰と云)つもし
の山、まりしてさとまいでじとちひたるを、ふもと
ちゝて、さうじおろし給ゆへなるとなるも、れ車
よりしじまて、れ(こだ)前ちなど、大(タ)将殿よりぞなれまへる。

中くらゐのむすめたちさゆりの君づらは、
ことわざしげきとのがきてのつとめにまぎれ
つゝ、それしもおもひつゞきこし給はず、弁の君ちる心、と、ふ
心ありさうしもあらで、たゞしきたゞしけりつることの外から
あるかれもそれなりしあるりけつゝ、きおもてえとつしひ給
しづかりまうり、此君ハつとりしうてう、ざりげなく
まうしかれ給ふことあり、すほうあるをきこせ給さこえて、
給のかたぶやうえちぶやうの御ぞあるり袖をさへまれ
給ふやこ給へバえアカし給ふずちんでのせんしげきさハ、
袖しくあはしぬべくこまくきこされさ御ありと、
人ぐこさしされバ、家ぞれりんりくさく給、此てハつく

十二

おかしげまで、ただひとくだりなど、おほとうなり
りきざ風、ことばもなつしき事かさそへぬへ事を、
いよく(ナム)こまほしうめとりて、をげうきてしかひ
給、なほつねにあるやうまべきれなりしひなりと、
きたのかたしきとりこまへれば、ワづ(タム)しりしそ、
まうでまほしうおぼをと、ここにえいで立給もず、
八月中の十日ばかりなれば、のべの気色もおかしき
比なるに、山里(ヤマ)のありき風の、いと(クリ)ゆしかれば、なほ(詞)
ばしかしの、めづらしうおりこなるかり、をちに
うたしふべきことあり、こやすごろのワづらひ給
なるも、とふしひかてしまうでんと、おほうたにぞ

きてゝぞちていて給はれ前ことくしかしでむる
しさ恨め六人どうりかり衣まてきつゝふことゝ
わるさうちなしもどまつ（ひえの山の麓く）がさ紀のをやまのつろ
などもさういきかなしもどおされ色づさて都
にまなくとゆくしさう歌ねまはなる後表もけうも
まさりてぞうゆるやもうなさこ業がさもゆへあり
さ海まもなしてかりそめなれどあてもうる住居
なしぬへりむん殿とおぼしさひんがしのもなち
いでに修法のぶんぬりてきるのひさしにおもし
すれがよしおもてに家（藤家）はおりしまもてはものくけ
びつしとてとゞめまり給れどいでうもなれ

なしんとしたるひつりたまへるを人（地のけるす）ありうつり
ちりをぶちてすこしのへぶてぢうりに（仏息下に出）けるるにハ
ひとしなり給ひず（夕）まらうとのねぬべきごころの
なければ（後来）こやのれうるのすれまへにいれ（夕と）なりて
上らうぶつ人ごれせうそこきてつくふ（仏息下詞）いとる
じけなくかうまでの給ひをひとしせたまへるを
なん。もしかひなくなりたてゆるばこれしこ
ありをぶる。きてしきをでやとせぬかるになん。いま
せばしかけとぐめまほしきこころつきゆぬると。
きてしいぶしのへり（夕詞）ひとしを給しれをくりす
もとせ給しを六（係）条院にうけ給りさしたること

物し程にてなん。目ごろもそこいとなくまざるに
こと物て。ふひのつうこゝろのほどよりハ。こよなく
とろかまれしんぞしらしことの。くるしう物など
こゝろ給。こゝやハ（蔵本比）おくのくるにいと志のびており
まをぐことくしかしぬさびのれ志けしひ。
おきさやうなりおましの程にて。人のれけりひとの
けしきしいとやりしかまうちこぞろさなど
志給。れぞのをとなひ。さばりなるまとさてね給
へり。こゝろもそしにおぼして。おかされれせうそこ
ちよふ程。すこしとをうへぐるかひまに。例のかねの
志など。さかしふへぐに抽ぐなどしまて。（タ詞）かう言りさ

なれうけ給りことの。手びといふぢりになりに
けりと。こゝなりまれどとうまてなさせぬへるうし
めしさなん。かゝふすのまへにて。人づてのれをう
そこなどの。かのうに罪しつゝふることに。まゝこそ
なしけれ。いつまゝかゝめしさき面に。人ぐ。ほく思ひ
給ふんと。たしさなくなん。ふもひつもしぎかゝら
かなりしほどに。ほのすさゝかゝるにあもなれか
ましかばかうこゝねくしうも見しざしまし。更に
かぢりすくくしうあれてさしかゝ人も。こぐひ
あしじかしとの給。げまいとあなづりまくげなる
面志ぬへればされ。そこと。中しなるれいし人罪

いでんはぞぐしうなどつきしろひて、かゝ（女さう訪）なれ
これへきうしめしたしぬやうなりと、（落葉）家は男ゆれば、
男（訪）づゝ男ゝ給はざめるゝはしいさまは、かゝり
ゆるべき紙、いとおそろしきまでもれ志給めりし
（賀茂ノ神のけ）
をこゝあつかひ侍し程は、いとゞあるゝなきされ心ちは
ありてなん、え男ゝぬとあれば、こは（ケナル）家（落葉）のれをうそこ
うとぬなをりて心（訪）ぐるしきれなやこゝ紙、あはふ
ぢうりなげき男しさせ侍るもなまのゆへにかゝる
ぢけなけれど抽紙見したるれを指などもれぐ
志きうるにもこゝなりなをし給までは、女いうるは
すぐし給りんこそ、こゝがれこゝめりしもこれもしさ

ことには侍らめと。をしいりきてしたすゝにより
なん。ふぐあなたぶ海におぼしゆづりて。つもり侍
ぬる心ざしをも。しろしめされぬハ。ほいなきこゝち
なんと思ひ給。げにと人ぐもきこしも。日(地)いりがたに
なりゆくに。そらのかしさもあれにきりわたりて。
山のげハをぐらき心ちすゝに。ひぐらしなきさ
しきりて。かきほにおふるなでしこの。うちなびきさ
けるいろもおしうこも。おま人の前栽(せんざい)の草どもは。
ころにまかせてしぶれあひたるに。水のをといと
すゞしげにて。やまおろしころすゞく。松のひゞき
あぶくきそしわたされなどして。ふぐん程よせ

ときさりてかうちなるゝほどに。ふけゝるもお
かゝるもひとつはあひそ。いとゝゝく男也。一所うら
ますげのごとく心ばそうしなるゝも義は拙おもひ
つげゝるぞ縁りん心ちなるゝ地もうちすゝ
善とそゞろゝいとゝうらくよしやいとうらしげは
志縁なりとて人ゞもそなるはつどひておはくゝる
かうさびどころは。おまろく気しざりけるはうとゞ
人ずくなゝりて家はすゞめのへりさやうなそぶふ
こともうちいでゝいべきおりもなく。かわのへるは。
ありのくびは軒のきまでちゝつかればまでん
くるもえいぞありゆくはいふずすべきとて

山里の衣をそふる夕ぎりにこちいでん元を
なきこゝ地してとゝきこしこまへば
山が川のまがきをこめてこゝろ雪も心元なる
人ハとゞめずほのゝまきしゆるれけりひにあぐさめ
つゝまことにくるさゝすれもてぬ[討]なるぞこゝなる
ゆざかれいゑぢハこゝしずきりの夜がきハ立とまる
べうもあらばやしもを給

つきなき人ハかゝることこそなどやすしひて志
のびあまりぬるすぢもほのめし罪し給ふ年ばもむ
げにこゝろ給ふぬにハあらねどしらぬがほのこゝもて
なしなんるをかくことにいでゝ恨罪し給をまづらりしう
ていとゞれいらへもなければいらうなげきつゝ心の
内にまさかりありありなんやと思めぐらし給
なさけなうあさけなき物にはしられてまつる也
いかゞハをん思ひけるさ後をぶるましらせなしん
とせて人をめせばれけれぞうよりかうふりえ
右近大夫将監 夕ノ家人
さらむつましき人ぞまいれる思びやるめしよをて
しましまなるしずいふべきことれ事ばこ思んなぶる

いと面なげなめるとこゝ今ハ打やもむしん。こゝよひ
このつゝりにとまりて。初夜（そや）のさしてん程にかれ
ねゝるゝに抱をん。これかれさふしもをよ。悟（ずいじん）
などのとのこどもハ。ゐるゝのゝざうぢうらん。
（愛岩郡ニあり下鴨ノ領之）
まゝなどゝ里をもて。こゝに人あまるゝ思か
せて。うやうの挽（こび）ねもかゝぐさしきやうに。人も
とりなすべしとの語。あるやうあるべしと心えて。
（左近大夫ん）
うけゝ面りてゝちぬ。さてこちいと毎どくし
（夕祠）
かれば。此つゝりにやどり侍りおなじうもこれ
こ寸のもとにゆりされあるゝん。何ぞりのおりし程
（律師ノ事）
までなんとつれなくのゝふ。例もかやうにあがぬ
（落美ふん）

して、おぎれだこころ乳色もえ給はぬを、うらそても
あるかなく、夜(後葉)ハおぼきどことさしめきて、かるらうる
あるらにもひけり給はんも、さ夜あしき心ちして、
ふぐをとさでおいしますに、とく(夕)(地)きえしよりて、此
をうそこさてつゝへに、ねざりいる人のけり
つきていりぬぬ、まぐ夕、菅のさりにとぢられて、
うちはくしくなりまゝろほどなり、おきましうて(せうそこう人之)
こゝへりしろに、夜(後葉ハ)いとむくつけうなりぬて、小乃(地)
こさうじのとに(か)ねざりいでさせ給ひ、いと(夕)ようし
ぬごりて、ひきとぐめなりけ、此(後葉ノ)月ハ入りてこゝへ
れど、此ぞのすそのおりて、さうじにあるにより

さすべきかたなりかれだひきしてさして水志
やうにまちてきかす人どもあきれていかにすべき
こと共おもひえずこゝろにかりこそさすがにちども
あれいと（藤兼心）りなくてあらくしたくはえひきかか
ぐらべくもたゝもれし給ふ日ばいと（詞）あきましう
ゑのへよしざりけるれこゝろのほどにちんとおさえ
ぢりに字ゆれどかぢ（夕詞）りまてさふしもんが人
よりけにうとましうめざ夜しうおぼさるべき
にやはかずなし後とも此こゝなれぬるこし月も
うさなりぬらんとていとのどやかにさ夜よくもて
しげめて志ふこと紙をうしたしを給（藤兼心）いれ給

べくもあらず。くやしうくまでとおぼすものゝ
やうなるけれバの給ひんこともしるまして覚え
給ふず。いと(夕羽)こゝろうくけかくしきさ此さ後かれ。
人しれぬ心にあまりぬかすさぐしきさつゝぞかり
して給ふめ。是よりなれすぎたることハさしに此心ゆか
されでハ此ふんぞられじ。いかぞかりちぶにくぞけ給ひ
まゝへぬぞや。さりたをのづから此ふじしきかしを給
らんものを。しぬておぼめしうけうとうもてなさせ給め
れバ。寄しさをんかるなさに。いかぶハをん。こゝちなくなく
しとおぼさるともかうなぐらくちぬべきうれへをさぐ
なまゝしきしを給ふんとぞかりなり。いひしきぬ此郭也

のこしゝ袖のしづくだけかゝればこそ。おのれがらは
かきけちつゝうつゝの路へ入り。さうじせゝえんのまへにたゝずと
まれなる人ゝめなれど。ひとりもあけず。かたりのけ
ぢめさと。さめてかばさまんこそ哀なれと。打まひ
てらしそ。心のまゝなる夜はまゝあらず。人の涙ま種
のあらしうり。おそはなる夜めいのなくることし。えはいへど
ことさらの。ふとしるまゝ。それをさの路けりや。魚をくは
あくがるゝ心もさぞ。うちとけぬ人まつの涙袖のあくがり
もなるびかげ。ちぢうしつらう身へちぢ。ぢりおつめて
ちうらげ。やりつなる心もなくり。風いとゞ心ばそう
かけゆく衣のゝしきむしの音も。よわりはてゝきこえ。

遊のまもひとつにまぎれてえんなる行あれば、ゆめ
ありのおもひけんごとく、ねざめさめぬべき其の気色を。
きよしもまゐずしう、（八月廿日ノ夜）つりがくの有の山のもちかゝるは
ど、どめぐうりまれ哀なり、あ（夕詞）はかうかばしきしらね
ゆる積にそぐくりてハおもひつれ心のほどしられ。
かうよづぬまでされでしまさうしろやすきなど
もふびおもひどとおぼし侍るなどことくや
すきはどのひとこそうらやまれなどうち
ワるのそつれなき心もつよくなれおもりこまなく
おぼしかるしるよえなんしづめきつまじき心ち
し侍る世中をもうげにおぼししらぬるしし

わりなしとぞ。よろづはなさけなくしきあはれなるていふぐ
いかべきこゝろもびしうぢしめぐらす。世はきはまる
かくのこゝろやすさやうにおほくはのあかすさ。然
なほしうげはこゝろひとつさ身のうきさまなりやと。
おぼしつゞけ給ふ。さめべくおぼしなりてうる
こゝろのつらは。かくひとつともいとかうあさ
ましきは。いやうはこゝろひとつすべきさまにはおもはんと。
いとはのつはあはれげはあさいのそ
落葉 きれのこゝやうき世をさわらるしまそめれ
そこ袖の色をもこすべきことの。御さまもあさきは。人がら
心はつゞけて。あさびやうはうちかずめぐるも。落葉ニハ うつ

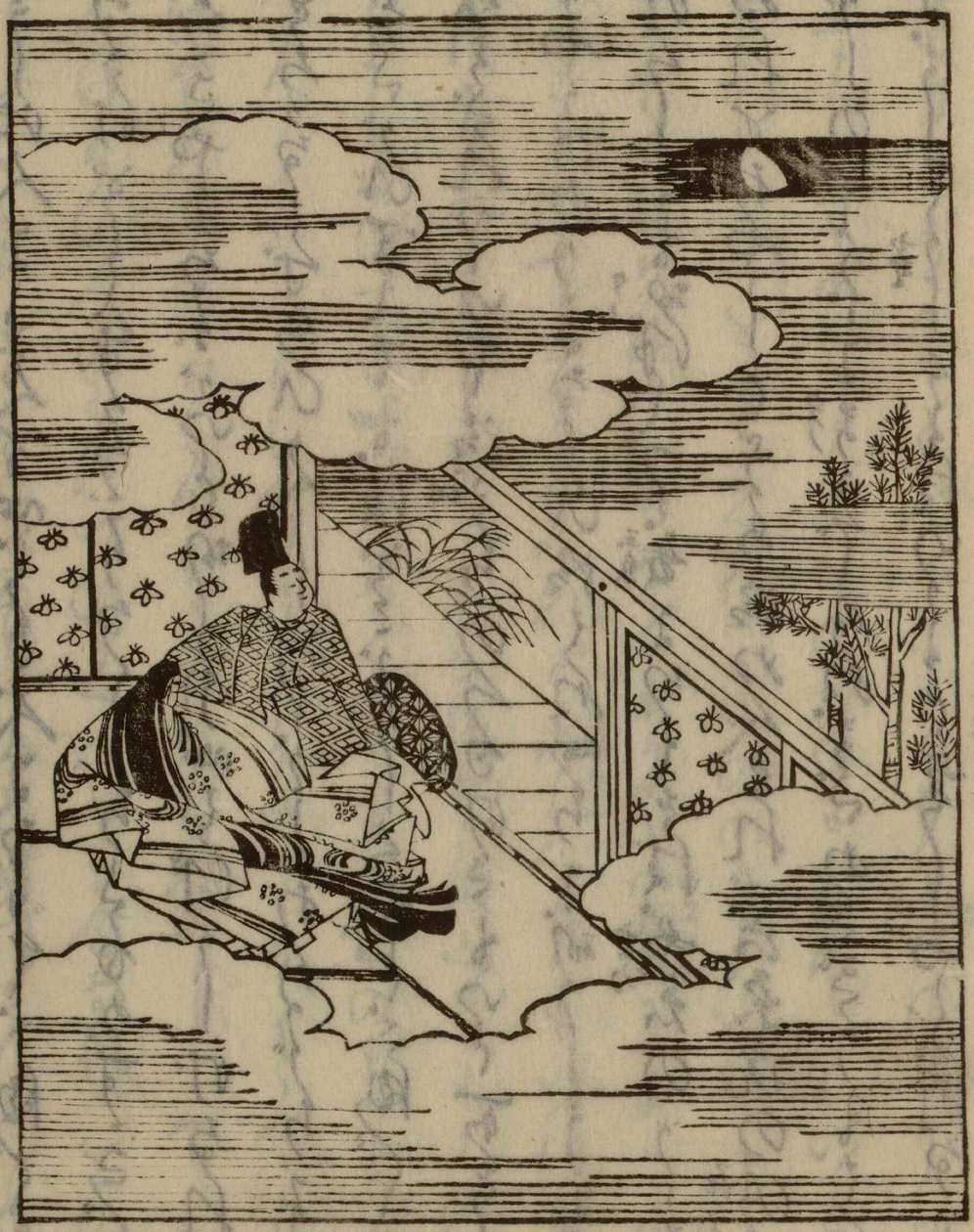
そしいてく。いつまいひつことぞとおぼさるしま。
ダ訶 げるおしうさそしけうしなど。ほくさしこまへう
をしさまて
タ おほうさはまれぬれぞぬをさきぞ比くちうし
袖のみやはかくるし。ひ訶 たかるおぼしなりねし
とて。月おくさうさまいぎなひさしゆうとも。おさ
ましとおぼさ。心づうまてなしのへど。ちうなう
ひさうをまりて。ぐ訶 ぐりぐひなさ心ざしを
けんじしりて。心やすうまてなしのへ。れゆうし
おしでは。さしまくといとけぎやかに笑し給ほど。
比 ぬぐさちうなりまり。月ハ夜なくすこしつくりて

きりまもまぎれずさしいりたり。おさもうちたる
ひさしの形はほどもなき心ちすれば。月のほと
むかひたるやうなり。おやしうちしたるくて。まぎら
りしぬへうもてなしなど。いたんかたなくなまめき
ぬへり。こ[柏]君の所ともすこしきて[タノ]出て。さ夜ふけ
のどやかなる物語をぞきこゝる。さすがに私[柏ノ]ゆ[ノ]れ色
ましかたに見しおとすをばうしめしげにうしと
きこゝる。所[言葉ん]うろのうちにも。[柏ノ]れいろいろなども
まぎをよばざりけるほどなどしこれもくれゆかし
きけるに。をのづからもてなされてこゝろ給ましを。
それぞにいとめざ夜しさこゝろの女なしさ夜に。

まして、うわうまじきことよ。よそまきくあたり
まぐまあらず。おほ(れ)度ちどのきくしひ給ひんことよ。
なべての世のそしりはさらにもいまず。僥(朱)にもいうま
さしめしおもかされんなど。もなれぬ変りしこの
ゆこころをそしめぐらすよ。いとくちおしう我心
ひとりよ。うつうおもふとも。人の抱いひいう
ならん。家をどころのしり給はざらんも。つこえがま
しう。かくこさなて。こころおさなくとおぼしの給
ひんもまびしかれば。おかさでぐるいでこまへと。
やらひ家し給よりほかれことなし。おさ(夕詞)ましや
ことありがかまほけ給らん。おさ家の心ひん所よ。

なほさしがおぼしきれよ。かうをこがましきさ海を
こしまりて。かしこうすいやりつとおぼしきれ
れんこそ。我のきけこころもえおさめあふまじう
きらぬことく。そしかしぬ心づかひもなしひけじむ
べう。心のへらしられとて。いとうきろめたく中こ
なれど。ゆくりかまあぎれたることのまことまなら
ぬれ心ちなれば。いとおしう口がれこげかしも。心
をとりやきんなどおぼいて。たがれためたりこと
あらはなるまじきほどの。さりまたちかくれて
出給。心ちそしなり
おぼつしや行ぎれ家まきほちつてやへたろ

ぬりをまけぞゆくべきぬれ衣(ごろ)は行えはさを給りじ。
かうまりなうやらもを給。はこころづくしこそもと
すれ給。げまこの(後葉ム)は名のたけかしずまりぬべき後。
心のとりんまぐまくらぶらうこうへんとおぼをば。
いうじうまてもるれ給
まけゆんまぐ紫の身をかぐとまてなをぬれ
ぶぬをかけんとやぞふめづらかるゝとかれとお
もめのへるさ後いとおかしうもげうしげなり



(タム)まめ人はかゝる心ざしを人はなりてさうぞくは
すさけなくしたりがほにうちながめずさぐく
ちさきやうなるがいとめづらしう心ちけしければ
そろうなしずきひえしいさゝかおもずちろう
あさがひ見えても後をさぐまりくやとさぬくる
へだゝれつゝぞ給。(地)うちのつめけきもいと本し。
みやうのおちさるひ給も心ちにおぼしうも心
ばらくまも(タノ)おぼしつ。(三条)女房はおもしをば。女君(雲ゐ)のうしか
ぬれをおやしとらでめ給ぬべくれば。六条院のひん(花ちる)
がしのおとゞに(タノ)まうでぬ。まへおとゞりもされ
ず。まして(少将)りしまはいつまで宮しやる。例なりぬ

れありきまかりと、人ごとにさしめくしばしうち
やすこまて、れぞぬぎんへ給、つゐに夜冬といと
きよらにしきどきまへれば、うのれうしひ川よりも
とうでゝなり給、れうもなど乗りて、れ前に乗り給、
りしるれふこなりまへれど、れんじもいれぞ、
まはかるあきましかりしを程、めぐ夜しうもちげ
りしうもおぼすに心づきなくて、宮も前のまりきて
給へんこともいとしづしうまゝかうことやと
かけてしり給はざらんにさしなしまても
こうけまひ、人のまれいひかれなき世なれば、その
づらきゝあまきてべきてけるとおぼさんがいと

かくされバ人〳〵おりしきてまうでゆくらん。
うしとおぼすとも、いかでかさんとおぼすぞ。おやこの
世中とさらぬ中にも家へぞそずぞものうし
めぐるまきみ人〳〵まりさけバおやまくすぐひ
こそハむかし地獄までもあれどさちるおぼされぞ。
人〴〵いかるうはげのまさらし給ても、ことしもを
おほまちろおぼしさぶれんまゐらする心ぐるし
あはれひおもそいかきんとぞふどちごの所
たりそこのゆりしさ紙ひきもあけさを給ちる◯ぶ心
まとなくて紀むげるさうてさき給わざらんもおぼ
つゝなくワかくもうらやましまぞ給らんなど思ひて。

ひろげられば、おやしうなる心もなきさ夜にて、
人にうらうらしてもこゆるおもひけされ、こげうしの
おやまちにしひなきど、しひやりなりしあきまし
こもなぐさめぐさくなん、えこぎと紙いへと、ことの
ほかにてよりつきをぬ、さらいまくげもなくいと
ころかうかいぬて
武しぬとつれなき袖にとぐめをきて我ころ
うしまどもなくうれ、かうなる袖もとかむかしこも
こぐひありやうとしぬへなすにも、さしにはけ、ゆきぐさし
らずのこなんなど、いとおほかれど、人もえまほ
にもこず、例のかしきなりけさの九文にもあしぐめ

れど、れえたひきりけず、人ごゝは此気色もいとおし
き紙、なげしうしまりつゝ、いかなる此ことりうは
おしん、なまごとをつけてもおりがたう長なる此
心ざ海は、ほど人ぬれどうろうをこれこそそて
ていこをとりや、先給いんと、なまふもおやうくなど、
むつましうさつしふかぎりは、なれがぞらおもひ
こゝろ、家もぞころもけてもり給いず、もれゝけ
まづしひ給人はをもしとこれどさしやぎこまふ
ひまもありてなん地なげし給、ひろつゝ日中此此かぢ
しゝ、河関(あざま)梨ひさりとゞまりて、れゞしるよこのふ、
(宣ぞう)よろしうおかしますよろしびて、大日(ざいまち)如来(まよらい)そしぞ(あぎり)

志給ひずはなどてかかくなるがしが心をいだして
つゝうまつる物ず法にまゐるしなきやうもあらん
あくらうはしうねきやうなれどだけしやうにまゐ
られたるとられ其ありとぞ也いかれていかり給
いとひじなどうすくしき律師にてゆゑり
もなくぞ(あざり村)やこれ大(タ)ねもいつりうゝまはまいり
うまひ給ぞとぞひ申給こゝやまで所さうことも給ず
右大納言(稲)のいとよき中にてかたらひつけ女人な
心ぞんしと此年にさるべきことまつけていと
おやしくなんかたらひ其しあふもかくふるも
ぞんひづしふとどふしひまとてたちよりたまへる

それがかくじけなくさく侍りさとさえて治いで（あざり刊）
あなかくさもなるがしまかくさらべきことなりも
あしざ、げさごやまうのぼりけるまかれましの
つまどよりいとうかりきなとれ出たまへなを、
さうかくてなるがしいえまいなしざりつかを、
此法しづらなん、大将殿（タ）の出あふなりなり、よべも
此車もへしてとまり治けると、くちぐ申ける、
げるいとかうげしさられこちてがしらいさきまで
ありつれば、げるさなりなりとせひあるを侍ぬる、
つゐまいとかうげしうもれし治志や、このこと
いとをちるもあしねことなり、人はいというそくま

抱し給ふるがしらもワクワる抱き給し時より
後君(タ)の御ゆゑ御ことはずほうをなん右大臣(タノ祝母)のゝ女
まひつけたりしかば一クうまさうべきこと今まうけ
給ひる事なれどいとやくなしおんさいつくまの
志給さる時まあへるぞうらいまて(雲ゐノ親戚とこ)いとやんごと
なし。ワクぞ君たちハ七八人まなり給ぬ。元見こ志
君(藤原)とし給ひじ。また女人(ほまみん)のあし兵身をうけ。長兵(じやうや)の
やこまままごふハ。ぞうやうのつこまよりなん。さる
いうじきむろひをもうろ抱なる。人(雲ゐ)の御いうを
むさなばちがきほどしとなりなん。まちしうけひ
みずとうしらつりてぞうひまいひもなてがいと

あやまちさことなりぎしまさりそしまさまもこし給
こぬ人なりよろげ心ちのまどひましかばうちやまと
こて對面さんとてなんまぜしこちとまりぬへるこ
こゝなりごごちいひしをぎやうまてとまりぬへる
まやあらんおぼかたいとまめやかまずくよりまぬ
しぬふ人をとおぼめ給なりし心のうちまさう
こともやまさんごごなしぬれかし　さはおりく
こゝれど人のれさ夜のいとうらぐしうおか
ぶちま人のそまりあらんことはもぶさすてうち
もしぶちぬへるまぶけやすくこゝろゆかされぬ
こゝいあらじとうちとけこゝろぞこし人ずくなまて

なさけすつかし紙にて、きひつりもや書給はんと
おぼしきが、あぢきなくも、うちぬるのちはふかねの事せめして、
うつくしきにも、つらいかなりしこそ、あまう
そのれなは、さらんうちあんとは、こうきこ海もざり
けつざしもおしじとはせちぶしとの給へば、いと
おしなれど、おりしやうなをきじめらりくはしう
きこせ。けきのれ文のなしき、家もほのまの給ちせ
つまやうちど男し、ぶば、越びつくり給けつこころの
うち紙男し、きくきんとぞくりみや給なん、いかがくう
ようはあらでちぬ、おしもちて、出給ぬる、人は
いつる男し待つつまつかよし、とはせひもよふして、越びて

人のきこしけるとも。あれもの絵ぞ。いとうくも
ちかしとおぼする。消ほろくとこぼれ出ぬ。こがらす
ひとくかしうおまへありのまゝにきこしつるん。
うしきれ心ちせらるとぞおぼしこゞなんと。
うやまうこひねがう。さうじもさして。ちまんと。
よろげるよろきこやうにきこしおまぞ。さてもうく
てもさげりこ。おまえよういもちなく。うまいうる
人まじ絵んこそ。ひといゝじくれ。うちくのれ
心ざしうおかず。さいうくまでいひつりかうしじゝ。
ようしぬりいべおぼしは。まなこいゝのうしてんや。
人いうまいひおしいひ。さいおしぬこしいうべき

まうあらん。すべてころ、おさなきうぎりしも。実に
さふらひてとも。え（地）のおひやらず。いとくるしげなりれ
心ちは。地紙笑しおどろきこれば。いとくおしげ
なり。けさうもてなし笑んとおぼいたるに。
（落葉を）（落葉ノ）
よげうちしうかうぐしきれ名のこちおべき紙。
をろかならずおぼしなげうかうすこしもれおぼ
（意味不詞）
ゆかひまは。つくしをおべうきてよそなる人来り
（落葉ニ）
くべかれどうごくべうもあらでなん。ことしでひさ
しう成ぬる心ちすやと。泪をうけてのおふ。まつりて
（おぼえ）
しうなん笑しさを給とぞうり笑ね。つくり給りんとて。
（落葉ノ）
れひさいがこのぬれまろうれるう。ひきれくろひ。

ひとへの御ぞほそろびたる。きうへなどし給ても。
とこなるもえうごい給はず。これ人ぞもいうにおもふ
らん。まるえ志り給いで。後にいさゝかもさく給ふ
おとんにつれなくてをしよとおぼしあはれも。
いうじうはづしかれば。又ふしのぬ心ちのいうじう
なやましきれ。やがてなをしぬさ面にもなりなば。
いとめやすかりぬべくこそ。おしのけのくぼりたる
心ちすと。をしくぶさせなふ。地をいとくるしうさ面
ざ面におぼしてには。けぞあがりけり。かねうへにこの
御とはのめしいみしけり人こそまべかれ。いか嗽
しことぞとさもせたまへれば。ありのまゝに

きこしめせでは、さうどのゝめでたきをおもんじて
うけたまはりて、けざやかにきこえさせつ。また
さやうにすゝめきこえさせ給ても、おほやけ藤ゐ御九
させ給へとやまきて。ち（源氏方ノ地）げいかへり気色はきこえしいでまして。
（藤壺ノ心）されどまことにいとまばゆくて。まれもの給ふめれば。枕
ようさづくぞおもふごのことはのこともおもはず。あの
むまずるあたりそめしようづしう袍そのことゝいを
さそまつりとうけうひちくちかひづけのそて。
このひと（夕）ゝいふきでもやまでとくいひつゞひ
いづんもまづいう定ぐしうべうよろづは。
おぼえまゝでいかひちくひきれとはまゐて。

いかなる人をくぶさ面しなどすうしおぼしなぐ
さむかるはあれどかぢりはなりぬるにうき
人のかくまでもすぐろは人はこゝろやうはあらじ
りしとすくをうくおぼしくして地の川かる
ぞ(道長ノ)ちる紙ひろしせしまへとあれば中のぬりごめの
戸(妻戸ノ)あけあまをてひろり(落葉ノ)ぬへるかハ(道長ノ)りしきれこちら
はもおれめなしずかしこまりかしつさきて給
つ日のれさほうあやまるずおきあかりぬるて(詞)いと
こゝろがはしく給れば(ひろしせ給も心ぐるしうて
なん)この小川か三日ぢりこゝろしぢりかるほどれ
年月のうちすかもかれいいとたらなくなん後(其世之)

うなしずしたも。對面の侍るべきにも侍らざめり。又
めぐり来るともかひやハ侍るべき。しんぬ時の
まゝへぐゝ無りぬべき世中を。あれがちになるひ侍
けるも。うやしきまでなんなどなき給。宮(後美ノ)もまの
のミうなしうとりあつめおぼさるれば。きこしめふ
ことも多くてこなり給。(作息所ノ)もれつゝこ紙いたう(後美ノ)しき給
ならず。きはくしうのかひさはやぐべきにもあら
ねば。まづしとのミおぼすに。いとくおしうて。
いうなりしなどもとひきこし給ひず。おほとなぶら
などいそぎ来しをて。ぬぐいなどこなるまてにあら
を給。(後美ノ)もれきこしめさずときこまて。(作息所ノ)どうてげうら

まうなひなをしなどしぬへど、ふれ(後美)ぬべくもあらず。
しぐれ(貞和ノ)心ちのよろしうこし給ぞ。むすこ(後美ノ)すこしあき
給。(地タ)うしこより又れふこあり心しらぬ人しを
とりいれて、(タ)ちね貴より、かねの君(後美ノいとこ)にとてれ文あり
といふぞ。まるまびしきや。かねれ文いとりけ。家を取
いうなりれふこまうと。さすがにとひ給。人(貞和ノ)しれど
おぼしよけれ心もそひて、しるまち(タノ法師と)男給けり
に。さもあらぬなりとおぼすと。心さけぎして。
いぞ(貞和詞)そのれ文なれ男しぬへ。おいなし。人のれ名紙
よき面にいひなを寸人いうこき地なり。そこより心
ぞよりおぼすとも。しうもちぬる人にすくなくこと

あらめこころうけくしきやうに罪しうらひぬて
れありしまゝなるんこそよろこめおひなきあまん
こゝろさ面なるべしとてめしよす（夕夏を）くるしかれど
なりけ（文行）おきましきれこころの程をこゝなりあしれ
いてこそ中ゝひこゝろ心もつきぬりぬべかれ
（夕）きくうしるあきこぞこえん山河のながれての
名低つゝこそてずは（地）とこと葉もなほれど（こ）も
こそ給ひず（此身ぞん）この此ゝこもけぎやなるかしこゝるも
あしでめぎ面しげる心（タノ）ちよがれまことよひもこれ
なき低いとゝいこじとなげまゝ（柏）んの元の此こゝろ
ぎ面のさしぎなりし時いとうしとさひしうど

あはれるのもてなしはまゝなるぶんなりしかば
しなるまちらしあり心ちしてなぐさめしぶるよ
心もゆるざりし紙おれつゝじや大夜のつゝりま
ぶひの給へんことゝしひし、ゝ給なをいうぶの
給と氣色をぶるゝんと心ちのかきゝぶるくらく
やうよし給めなし、しぼりておやしきゝの
何とれやうまうきのふ、これもしげなくなりまて
侍りとふしひまつりのへつなりまてそぐのし
きしゆれどいとられぐしかしぬさ夜まもれ
し給めれどこゝのへまづしひてなん
なをなべししほりくのべ遣をつゝことてれと

東ごろりの者とりけんとこゝろきさして、そし
ひ〇りていぐしまて、ふし給ぬるまゝにいとゝ
くるしがり給ふ。もれしけのこゝもめけるまやと、人ゝ
いひさゝぐ。例のがんあるかぎり、いとさはがしう
のゝしる。家（藤家）をば我ひろゝせ給ふと人ゝ字ゆれど。
此（藤家ん）月のうきまゝにをくれ事しじとおぼをば、何と
そひ申へり。夕ぢ殿は、このひるつゝより三（雲内）案殿に
おりしまけるゝ。こゝろひ立（小雲人）へりまうで給ふんり。
ことしもまゝがみにまぐさまゝにくるしかんし
ちどわくじまていとちかくとし此のころ、もと
ちきこゝろもちへにもれしひかねてちげき給ふ。小（雲内ん）の

くもがくれありしよし所のさまにて。こゝろ
やうしよきをかしきやうにて。おもしろやうにて遊
まそあそびますゞしりしつ。ゆうのゝちまじま
みしのへりがね色つゆどまぞ。ごれれり色を
まそまられつせうくれいまもあしめ鳥のおとに
やうあれべどもこともとふて夜ぞ。れとちかげし
ちうきうきそこ法。やみもれ帰らうちあれど、
いとくこうけなてあひうりてれきろうりこう
ゆふ。あさましうこ后いつよ志らでおみなしつゞ。
六条のひめぎしのしんの八文字けき風とこうて
あやましげみしまへうぬ。源氏のおまへりゆで

出つるほどまゝもまうでずなりぬれバいとあし
さまいまの夜いかゝと思へたりつるなり。そのへよ。
けさうびたるかゝのさ夜かさてもなく浅くしの
れこまや。年月まそへていたうあなづり給こそ
うれたけれ。ひんとゝろをむげまとぢ給ぬよし。
おうめさてあしこがれまもひたしろひ給ねど。
さすがまかともこでもぬへりとし月まそふな
あれづらりしさはれころなしひなべありとぞ
うりかくうりけしぶちぬへるまけぶうりてまゝ
やうまあしさき夜してのたへバうちつひて
そはともうくもあらんよれつるのことやまゝあら

じ。しよろしきりぬかれこの。うくまいぞよ
きるすくび。とつ雨をまとく人て。まれおぢしうらか。
鳥のせう揚（ヤリ）のまれく。やうなりしつま人らよ
らん。ぎりうくなしにて細よ俊まれ給へ。れるめ
まもりけりしずやおまるゝが中するれにて凡まるさやと
こくなるけぢめにくろうそぞよその姿ともころ
まくこワ。心ちも本にかりがくおしこへども
衰るすぢもくてぞしあうく（行きつれ義ノ意のく）おにあれあするまじ
まもりけりやうて。あれまぢひこれぶ。ひとぞくち
あしきぶ。このまん。くおそん。て。ぶ。みすぞりけ文の
きしきうくぞとづうきくんの心にて。おぞむこそさ

夕へだ。いとまほひやかまうちワしひて。抽のもん
だへしさつろり出ぬふほど。ぶりぬる人ろしや。
いといまめしくなりうはれる山鳥色のすさまじ
さも。こゝろしかぎなりまけることなれば。いとなん
ろしさ。かねてよりなるべし。給もでとうろち
給も。まくてもあらず。まほうまとおぼすぞうりまは
何ぞかこゝゆらん。いとうそあるはこゝろの人面な
ましぎもれさそしたらする人ぞあるべき。おや
しうもとよりまろをばゆるさぬぞうしおなをかれ
みどりの袖のなどり。おなづらうしきまことつけて。
まてなしなんとしふやうあるまや。夜ぐこさ

まくらことばにもはのめくめり。おいなき人(若菜)のれいあ
まもりゐしかなどのこまへとづ(地)ねするありべき
ことあはざ。ことなるおしうず。大将(雲井ノ雁と)のめれと
いとうしとおもへどそれもおもほさず。とかく(雲井)いひ
あらひそごのれかといひおもくしぬつればせ(夕)あ
てもあ。もと(求)めそでつれなくおほとれどもりぬれば。
むげ(心)にもしかとそでいでてしがれどこやまざきの
文(文)なめりおなどおもふんとめどおもはば。心
うしなへりが。書(書)のあしまへるよべのあまりの
あるなどさりけるてさがりのへどもすくくし
あへらん程どもなけれど。いとこころやましうぞ。

明ぬれどさしまもおき給ハず。如ぎ(書)ミハ君ぐうちま
おどろかされて。ねざり出給まぞ。我(タ)もいまおきぬふ
やうまて。よろづまうぐひぬへど。えこうけ給ハず
如(書ん)いくもとめんとも出ぬへらぬをぞ。げまけさう
なきけふこなりかりと。こゝろまもいれ日ハ君達の
あまてあそび。ひねなけくりひろひすへてあそび給。
文よこてなくひなど。さ海ぐまいとあはしくしく。
ちいさ紀ちごもひかりひきしろへ。ばとりしふこ
のことも出給ハず。おとうは(タん)。ことなるもおぼし給
ハず。うしろまさく罪しんとおぼすり。よべ君は
ふこのさ海も。えてしうまこず。收ましうば。こぬさ海

なんもちらしてげっとをしつりぬべしなど。しひ
こゞれぬふ。地これもくれぶい来りなどしてのど
うまなりぬりひるつる。しひ夕ひづらひて。よべ初のれふこ
そなるごとうなし。おやしうこをる雨もで。
かふもとふらひきしぬべし。なやましうて。六条にも
えまいりまじかれば。ふこ紙とそいなしめなるごすか
ありかんとの給が。いと雲ぬさりげなければふこいなこ
がましうとりてぞりと。すき雨じうて。それこと
をばかけ給つず。一初の深山風に。おやまちぬへる
なやましさなるとおりしきやうにうちこそ
ぬへうしとさそし給。いで夕初このひがことれつゐに

の絵そ、なるまのおしきやうかあり、世人になずらへ
絵こそ中くもづしかれ、この女体こちらもかけれ
おやしきまめざ面をかくの絵とほゞ忍むらんもれ
をとゝはかれごとまいひなしてその文よいげらと
のこまへど、どみ（雲ぬ）をひき出絵いぬ程に、枕（タ）抱説なと
まてしばしかしぬへる程に、薯にかりひぐらしの
こゑかりおどろきて、山（ん）のかげ（光ノ）いかりきりかく
がりぬらん、おきましやかふこれ此ゆるすをぐる
といとおしうてこゝじしらぜがほかりすぐ
をしすりていまなしてしまうとりなさんとおがめ
おいすりおましれおくのすうしあがりこの玉を心とま

ひきあげぬへれバこれまさしはさこぬへるなりけりと
嫌しうもおこゝぞましうもおぼゆるにうち思ふてこ給
まかう心ぐるしきことなんきけるむすつぶれて一夜の
ことに心ありてきゝ給けるとおぼすにいとおしう心
ぐるしうよべぐるいまさひあし給けんぞふも今
までかゝ給ぐるといたんかたなくおぼすいとくるし
げにいかひなくうさまぎらりしぬへるさ海にてお
ぼろけるさあまりてやはうくうさぬへつらんつれな
くてこゝろひのあけつらんといふべきかたのなければ
女君(書ぬ)ぞいとつらう心うさすゝろまかくあぐへくさて
いぞ　けぐるしりぞやとさ海ぐ一月もつらくすべ

てなきぬべきこゝちしこまふやがていで
こちこ海もんとするをこゝろやすく無いめを
おしぎらんもれかしひとをかくの給いうなしん
うん同まをありけるをもしこ海さうりおもひ
ゆるし給ひぐおしからんな紙よかんこと紙こそと
うりしき心ま言して まづこの御道を罪れぬふいと
めづらしきれふこ紙かるぐうれしうこ給まこの御
とがめ紙なんいうまきうしめしこることうりか
秋(タ)の野れ草のちげこはまけしうどうり
れの拂むすびやれをしおきらめ罪れさすうも
おやなけれどよんべのつゝかひこやごもりまやと

ありこやまはいとおほくきこしめて、こまやまあし
ときは馬にうけしをきて、一夜のうちにをぞなれ
ぬふよべより六条院にまうしひてぐいぬなん
まうでけるといへとていふべきやうさゝめき
ごしへぬふしこまはよべもつれなくこえ給し
はかしき紙、悪あへで、後の罪をもつくしあへず。
うしこ罪給しをそれは過ぐるこしず、かふ乃
くれもてぬるをいかゞうりのはこゝろにかけと、もて
もなれてあさましう心もくぶけてよろしうり
つるはこゝち、又いといたうなやミ給、中しさうじ
このはこゝろのうちにこれよしをとまうしと

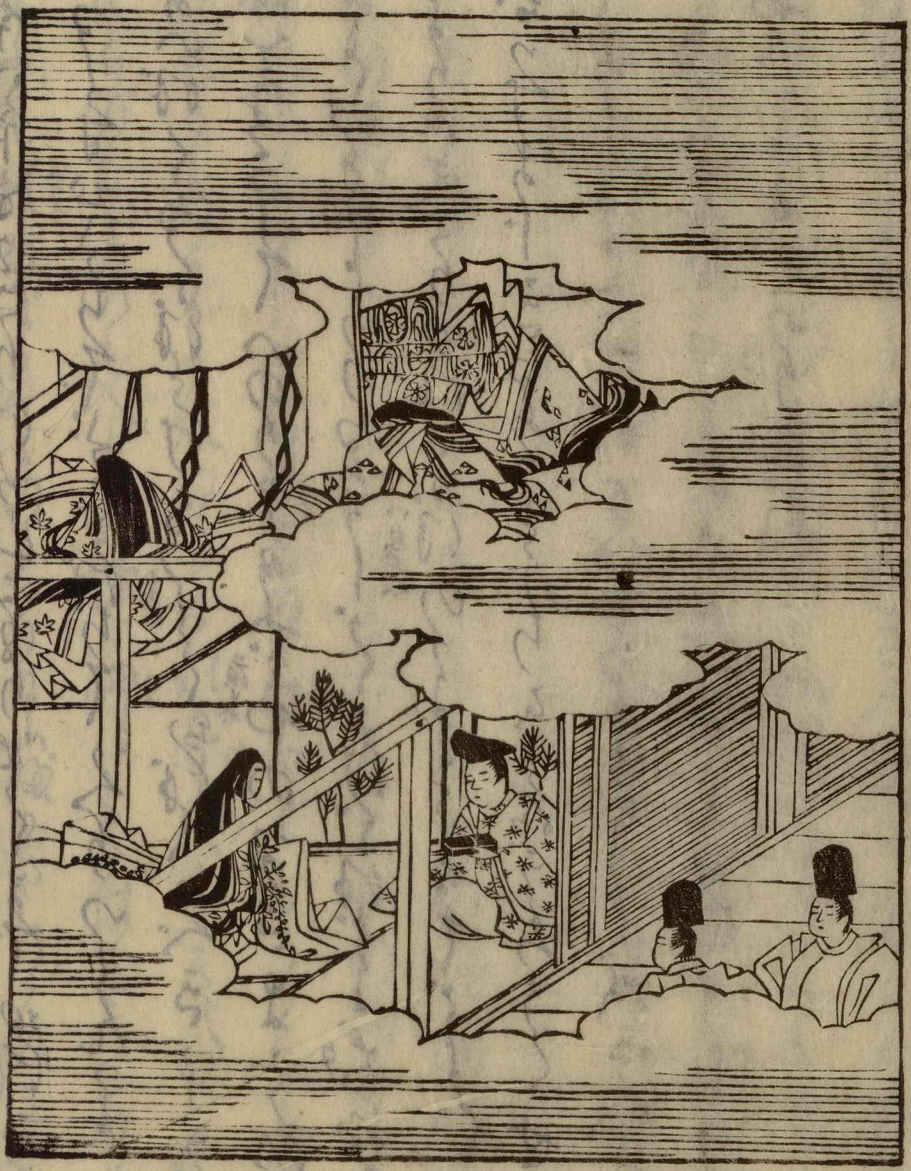
おぼしおどろくべきことしなければ、ただ見しぬ
人にうちとけたりしまさ夜をえしことだらり
よそくちおしかれ、いとしもおぼしたまぬを、かく
いえじうおぼ(清原本)いたる紙、おさましうとづしう、おき
らめきそしき給へるなくて、れいよりも拙もぢたぬへる
気色えし給を、いと心ぐるしう拙をのゝおぼし(藤原本)そふ
べかりけるとえなるも、ひとつとふるがりて、かなし
かれば今更(清原本)にむつしきことをばさそしじと、たへど
れ出すくをとはいひながら、たりずに心おさなくて、
ひとれもどき紙をひぬべきことをとりかへすべき
ことにはあらねど、今よりはる紙さる心しらまん。

うずなるぬ男なぐらもよろげまもぐらしきそく
つるをいまはなまぐすをも見しまり世中のとき海
ううぎ海のる様をも見し毎どりぬべきほどに
こなりをきつることくそなるぎ海（好きなり）いうまろやすく
とそこなりつれなる後いといまけてつうきれ心
をきてのなりけることくまひこぐれ侍るに心海
まばしの食もとぐめまほしうなんくて人ぐに
すうしよろしくなりぬる女のひとふたりとこる
ふあしいぐろうくあもつけきつぎなるをまして
かるれ男にはさぐらりおぼろけまて人のちう
づき字ゆべきにもあらぬを（柏つくり）まれほうにころにも

つゐれ事程とさし此もこゝ事りなやこしかど、さう
べきれすくせまこそは院(衆)よりりじめ事りて、是し
なびき、そのちくおとゞまもゆるひ、すべきれはしき
ありしは、そのれひそりしも心をこそくいかで
もとせよそり得しことなれど、末の世まで抱きき
れありさ面を、けがれあやまちなしぬ、ほ、おほ兎を
かとちて、こ事りすぐす代、いとうへのこゝ我こゝ
よろげまきまくうりぬべきことれ、せきそひぬ
べきが、さてもよそのれ名をがきしぬがなりて、よの
つゝのれありさ面にぐるあしば、なれげりあり
へんにつけてもなぐさむことゝやとせひなし

侍る所、こよなうなさけなき人のれころよも侍り
けるれと、つぶ〳〵となる給、いとつりなくとし
ことあてしの給を、おしらぶひそうけんことれ業もなくて、
こゝうちなきぬへるさ所、おほとうならうしげなり、
うち所もりつゝ、衣なることかは、人をとりぬへる
いかなるれすくをまて、やまとかしずものをかゝえ
おほすべきちぎりかゝ里けんなどの給まゝに、
いらじうろしうも給、ものゝけなどもかゝるよは
めよ、ところうるもれなりかれば、よはかるきしいりて、
こゝびえにひえ入ぬふ、律師もさけぎこちこ
まゝて、乾などこそのこもりぬふ、坂かきちらひまて、

今ハ命をかぎりけり山ごもりをかくまでおぼろけ
なしす出さちてぶんこばちてへりいしんことの
めいぼくなくほとけもつしくおぼしめべきこと候
心をなうしていのりまゐふ（夜業）こやのなきまどひ給
ことゝいとことゝりなりしかくさけぐほどに大（夕）ね殿
より此文とりいれうほ（は見ぬ）のうまゑまゑまてこよひも
おりすまじきなりとうちゑ給こゝろうく世の
ためしまもひれめべきなりなまく我さへさう
云の案をのうしけんとさ面ぐおぼし出りに
やがて毎えいり給ぬ



あいなくいうじといへばとろかなり。むかしよりも
もれゝけりも。ときぐまづらひ給。かぎりとこ
ゆるなりくもあれど。れいのごとさりいれる
なるあるとて。かぢまいりさまげど。いまいの
さ夜ハしるかりかり。夜ハをくれじとおぼしいり
てづとそひかしぬへり。人ぐ来りて。いまハいふかひ
なし。いとかうおぼすとも。かぎりあるこちなは
へりおもすべきことなりもあらぜ。しるひきこ
え給ともいかでかれこころなはかなふべきとさら
なるかことなりをきてて。いとゆくしうなる
きれしあるもいふかきつぎなり。いまはさら

せうまんとひきかへてまつれど。すくこ
うやうそてまつれもおぼし給はず。経法のこゝむ
こぼちてぼうぐくしいげまり。さうべきかざり。
かく人こそこちとまれ。いまはかざりのまゆ。いと
あしうころぼそし。さしろぐくのれとふくひ。
いけのまゐりうと。ゑ母。おゐどれもかざりなすく
こくおざろさおて。まげこくおくり。六条院より
もちじのおがこうまもすべていとまげうるへ
こまふ山のこゝかどもなきうしめしていとあはれ
まれかこゝうへこまへまこ。こやもうれれせうそこ
あそばれげらしまうげ給。ひぐろうそよくあるやこ

絵ときゝ口ゝりつれどれいもあげしうのこ
きゝもべりつるなしひりうちゝ也こゝてあん
かひなきことなばさるもれまて思なげい絵
らんありき夜をしもうるなんおもれまこゝろ
ゞるしき なべての世のこともりりあげし
なぐさめこまへとあるもめ也こゝえ絵もねど
(後筆)
此也きゝし絵つねりさゝてあしめとの絵かう
(法貞子ノ地)
ことゝてかふやゞておさめこてまけ家とて此
(法貞子)
といのやまとれかゝまてありけるぞよろげる
(小弱君ノ兄之)
あつひきゝしけるからとゞ志ぞしこゝ
てまつらんとて こゝやもおしこゝきて絵かれ
(後筆)

どさてもさびあらんべきさまするをば。これのそぎ
すて、ゆゝしげなるほどなるぞ。夕顔おりしる。
羽をかはす後。日つくぞあしうりたりけど。人ことには
のみて、いひともなりしう。哀よ家の物ばしもげらくん
こと紙をしろう兜めて。ぐくしもつらきつり
まへうこと有ずと。人ぐつきめこきあれど。夕顔て
おりしめぬほどさんと紙そつり法ほどいと
心すぐし。ゆしげまひさへぐてめでしう。
ぎしこれをいうくして。ごれよしおもてよいれ
なりやまとのうこ生きてなくうし。まり守る。
うまどられすれこまなしうまめて。妙なよびつぞ

させ給ふ。おろ限心もおきまらず。抱おぼしぬ程なり。
うく(タノ)ひたりのへるまぞ。いさくかなぐさめて。かねの
志ハ第ろ。抱(タ)もえの給やらず。涙もろにおいをぬこゝろ
づよさるれど。京のさ侍人のけもひなどを見し
やるもいうじうて。つねなき世のまさ侍のひと乃
うへなしぬもいとかなしき歟なり。やゝこゝろひて
よろしうとゝたりのふさ侍にうけ給りし
ばゝ。志のへたゆゑたりし程に。夢もさむるほど
まべなるなど。いとおきましうなんときこしのへ。
おぼしたりしさ侍。これにおぼくハ(内息子ノ)れ心もこゝぐれ
ましぞうしとおぼすなり。さるべきとはいひ

なぐしもいとつしき人のれちぎりなれば、いつ
へとたりしき給もず、いかまきたしさせ給とかき
こしもべるべき、いとかりしかなしぬれさ海まて、
かくありもへいそぎ、ひたしせたまへるれこころ
ぞへとおぼしつゝぬやうなんも、おまるまり
給ぬべしと、くちぐきたまれば、たゞをしも
うりてまれいつゝべきことも、おぼしずとて、かし
たまへるもことをりまて、たゞ海はなき人とこと
なしぬれありさ海まてなん、ひたしせのへるよしは、
男しさせ給ぬときこも、それへぐもひをへるさ海
なれば、さたしやるべきなるまなきと、い海すたし

こゞりもしひのどめ。又しげまり給なんまいり
こんいかゝしてかゝはりまとそのれありさ面
なんゆゝしきとのゝまへバまほ（お初詞 地之）にはあらゐどかの
（貞和ノ）均もほしなげきしありさ面をかゝもしづ罪て。
（夕ゆへ）こゝち罪さすゝさ面になんなり給ぬべきかゝふハ
いとゞこゝぐりがほしき心ちどものまどひに罪え
させたゞふゝことぞも給りなん。さしばうく（長慶ノ）罪し
まどへるれこゝちもかゞりあゝことゝて。すこし
しげましせぬひなんほどに罪さをうけ給いらん
とて。我ともあらぬさ面なれバのぬひ（タノ詞）出ることも
くちふるがりて。げ（詞）にそやこままどへる心ちすれ。

ゐ後さてしなぐさめまて、いさくうのれ迄もあしば
なんなどの地をさてしらひづらひ給ふ、かなぐ
しうさすがよひとさはがしかれど、かへりぬ、こ
よひしもあしじと思ひることぞのしるしめいと
ほどなく、さはくしさ後いとあへなしとおぼいて、
ちうさこさうのひとぐめしおほせて、さうべさ
ことごもつうまつるべくをさてさぶめて出ぬ、
地ことのよはかなれバそぐやうなりつうことごもいか
めしう、人がずなどもそひてなんやまとれかこもな
がこさとのくれこころをさてなどよろこびかしこ
まりこさしゆ、なかうりぶよなくあさましきことく、宮一

かしまろびかへどうひなし。おやと子ゆともいと
うくはなしかすまじき物なりかりとこなる人ども。
此れこと紙文ゆしもうなげき事也。やまとれうこ
のこりのことどもしたゝめて。大和言詞 心ばそくてもえ
おいしまさじ。いとれこころのひまあらじなど。子
ゆれど。後案ん れこ〇の名ふりをぞまげぢうくてしひむ
きこしえんと。此山里にすこもてなんとおぼいたり。
此れいこまこもれる傍は。ひんぐしおもてのまゝ歟。
しもやなどにまもるまゝへぞてしつゝ。うすうり
ねたり。よしのひさしをやつして。後案 文ハおもし
ます。おけくるもおぼしワねど。月ばへ名れば。

九月はながめ山ちらしいとをかけしこゝ本(この)紫乃
うくろへなくなりてよろげのゝしらいくらしゝ錦
かれば菩薩(ぼさつ)のほうるのそくはあまはされてひらまも
あくてあげしあげさゝ命さへ心はうあすとうと
さしうつらしじうおぼえさみへびもろげは地
かなしうちまどへり。大菩薩は日ごとにみつひ実
まよさびしげなる会仏の僧ながらなげきむぞうう。
まうげのまれをいうしとみつうぞあひ菩薩やの内
まへは、おそれはころあさゝ云の葉をつらうて
うしこ実し、何かつきもをぬれとふしひとこさて
タへど、菩薩ぞうてぶは、これんどずずろうはあさましき

ことに紙よりれ(賀茂)れそちまうさがひなくおぼし
しきて。きしうを給ふしこと紙。覚し出ふ。後の世乃
ゆつこまさへやちるらんと。ひ(タ)まころこうちして。
此人(タ)の此こと紙ごまかけてきし給ひ。いとゞ此らく
ころうさなうぶのまゝほしにおぼさる。人(地)ごも罪
ひづしひぬ。ひと(後撰)くだりの此返ごまなきを。志(タム)ぢしハ
心まどひの志のへるなどおぼしけるに。おまりに
ほどへぬれば。かなしきこともかぎりある紙。おまどか
かくおまりこしり給ひずハあるべき。いふかひなく
ひかくしきやうにとうしめしうこしくの
すぢに。茶やてふやとかけばそあしめ。こゝが心に

あそれともひ抱なげしさうさぶ海のことを、いか
まともふ人ハむつましうあそれにそおほゆれ
おほ(蓑ノ母)ミやのうをゆへりしを、いとかなしとせちに
もしに、彼(ち)仕(じ)のおとゞ(ひ)のさしもさふらまへらぶ
ことゆりの世のワれに、おほやけくもさ、さほう
ぶりのことをけうじ給しに、つくくうろづき
なりしに、六条院(源)のなかく会ぶに、のち乃れ
ことをもいとなこ給ましが、ワがおさぶ海といふ
中にもうれしうこなりし、それありに、右来(柏)の雪
とバ、さりワきてもつきましぞし、人がらのいとう
ちげまりて抱をいとうもとゞめたりしうろに、

あれもまさりて、人よりふるましがおろしう
おぼしなるべ、つれぐと物をのみ見しのべけて、
あしたしのふ、女（雲ゐん）君ある紙この山中のをしき紙
いうるまうるけん、宮を取とそふきかりしも
こ海やうし給めりしがなど、おもひえがたくて、
夕（タノ）着の色をあらがめ入るく、ふしぬへるをしろ、
もう（雲ゐノ）ぞしてとそまつれぬへるをしろさうこの
もしな

あれ（雲ゐ）をもいうまさりてうるぐさあんあるや
急しさなさやうるしさ、おぼつるさしそころ
うれとあれば、ほ（タ）しきそ、さ海ぐまうくさひ

よりての給まげなれなきかよそへやとおぼせ
いとらくゝとなしひ
いづれとうけさてなぐめんさえ久家法也も
まぢれうへとこぬ世をおぼるゝこゝそうおし
れとかいぬへりおぼかくへぐそこまへるゝとく
霧のあもれをばさしをさてこゝなしず顔けく
おいすおぼかくおぼつなくおぼしまびてまる
ひるりぬへりれいこなどすぐしてのどやかると
おぼしまづめれどさまでも思まつまじう今ハ
このれなさ名のなまうはあるがちまもつゝまんこゝ
よづさて、つゐのちひかるゝべきまとそいと、思し

さちまければ、小方（まさか）のれさひや、早紙、おちがちにも
あしがひきえ給ひず、さうじ（彦兼）にはつよう見し
たるとも、かれ一番ぢりのれうしにぶんを、さん
取まかうちて、そしもすくぎたて給ひじと、これも
しかりかり、此月十五日、野山のうしきはかりくに
しらぬ人ごまたごまやはあげゆる、山風にこへぬ
まぐの事来も、罰のくず紫もうろあつたしう、
あしそひちるまぎれに、さうとこど程のこゑりて
うに、念仏などの声ぢりして、人のけちひのと
すくなう、まがしの吹ちしひたりり、麻にたぐ
面がきれもとまたずこつ、やま田出ひたまも

おどろかず。笑こえさいはどもの中にまじまて。うち
なくもうれへがかなり。勝のこゝろいとゞ拙おもふ
人をおどろかしがかにこゝかしかましうとゞろき
ひゞく。茅村のむしのこゑでより取なげになるき
よりて。かれこゑくされたるより。まんざうのまれ
ひとりのこゝ心なげにもひ出て。つゆくこゆりなど。
これれいのこのごろのことなれどおりかし取から
まや。いとこへがこゑ程の拙がなしさなり。例タのつま
ぞのもとに立よりなて。やがてながめいざして
こちなへりなつしさはどれなをしに。いろこ海
やうなりぬぞのうちめいとけうしにすさて。かげ

よしりこう夕日のさすごとなる心もちうさし
さこうまはゆげよけぎとなくおゆぎ候さし
くしぬくるまつさかこそくういあしまほしそれ
それごまうもあしぬをとこそまつる

此タメ詞
あれこひのちぐさあまたりべく。をもしろきのこ
ほひまそ。かねの声とさうつきそめしよすがそのみ
頼もしかりけれど。かく〳〵人やそひねこゑとこゝろめく
みそ。えこ海やまもこゝひ結ず(タ羽)れなくてぞな
くわらのひそ。く山かくもけいろこゝろざしぞ。
べそ。御くべくや八。こりもいとかしやとそでぬぎ
ともこいれぬこ海まやまれこゝをちぢめてちか代
ちか代とちらまののへば。此むすび文の事をすゞれ乃
つまうすてとし出ぞ。すそとひきそばめいく
ねこらやまとれこのつ(かね言)まうしちかれば。ちられなしね
まらま。かさなくまうかつゝそ結ばれぞ。こねの

いろいとうてゝ。ゆるぐこのもきぬひとうさ。こう
ちきくさりかく（夕伺）つきまぬれことはさるものまて。
こゝえんかるなきれ心のつしさ紙ふそふるよ。うろ
ぶしねもあくがれまてゝ。こゝろ人ごとりしとがれ
いれ侍れば。いまはさしまゝ志のぶべきるなしと。
いとおほくうしこつゞけまふ。かれ今もれれふこれ
さ夜もの給出て。いこじうなき給。これ人もまして
いこじうなきいりつゝ。それ夜の御返さへこし給し
どもりましを。いまはかぎりの御こころよ。やがて
おぼしいりて。くらうなりまし程の中のうしこゝる。
御心ちまどひまけりを。さるよはめりし。れいのものゝ

けのひきいれまうとなんこゝへし。すぎましれ
ことにも。ほどくれ心まどひぬべからし。おりく
おほく侍しを。（後撰）ゆめのあるじ夜にしづこ給しを。
こしらへ申えんのれこころづよさになん。やうく
抱おぼし給し。これれなげきをば。（後撰）おまへにはこゞ
紙うれれかしきまて。おきれてくらさを給しなど。
のどめがたけようちなげきけく。ちかぐしうも
わしずきしも。（夕詞）そよやそもおまりにおぼめしうい
かひなきれこちなりいまはうじけなくとも。
これとうはよるべに心申し給へん。（朱ノ）れ心ずこもいと
うきこれに世中と云しこえてる。雲ゐなる

あはれバこそしうらひ給へることいとゞうくハ
うきハ気色ことしたまへるけのこともきこゆ
べきまこそせまおりへどとおぼすもとしかめ
世ありがたくかれ見れのハこころうかけ
ありべきことかハちどころげにおぼくのこまへど
ことありべきことありて、うちあげくれつ。
あれいとつくずと見れなどしらぬやとて
夕 里とほみ小野のしのハらわけてこそ我も
よろこそ心もおしまるとのことへバ
かほる 霧ぶかき秋の山人ハあれなくれ
ききおもしまへつる、ぜまるしまどおもうしましのびやう

なりこはづゝひなど紙。よろしうきくなしあへり
はせうそことうつ事あへど。いまはりくあさまし
き夏の世紙。すこしもしひさまずありあしがなん
こえぬれとふしひもきこしやるべきとのこ。すく
しかるいこと給。いこじうつかひなきれうろなり
なりとなげきつゝかへり給。こちすがしも衰なる
事をなげて。十三日の月いと常やうにさし出
ぬれば。式ぐしの山もこどうましうおもすかり。
一条の家にこち成りいとゞうちあぞれてひつじ
さるのこのうづれこるをこいるれどはなぐと
おろしこめてひとりけもこゝず。月のこやつ見れの

おもてとあらはすゝあしらるに、大納言こそ
てあそびあるじ給しありくをも出ぬ
夕しへのかげすゝしてぬいけ水にひとり
やどもる秋のよれ月、とひとりごちつゝ、夜になり
ても月をしつゝごろいそゝにあくがれぬへりさも
ミぐるしうあらざりしれくをかれとゞごちも
しくゝあへりうへいまめやうにうろうくおくがれ
こちぬるれ心なめり、もとよりさうかさうなるひ
ぬへる、六条院のひとぐをともすれバめでこそ
ゝめしにひさ出つゝごろよりぞあいゐぬちなさ
物に出ぬへるわりなしや、紙もむかしよりしゝ

ゐしひゐましかばくめもゐれて中にすぐしてま
しせれゐましまゐけべき此心ぢへとおやもしらし
よりもじめまりめやすきあへ拙ましゐへ弘紙
ありくてすゑまもちぢかましきことやあらんなど
いといさうなげいゐへり夜もあけがたちくかる
ミううち出たまふことなくてそむきくり
なげきあしておさぎりれられまもまるずれいの
文とぞいそぎかきゐふいと心づきなしとおぼせど
ゐしやうにもだいぬいずいとこまやかなりきて
うちとさてうそぶき給ふのびゐへどもりてき
きつけらる

いけとうはおどろかすべきあけぬ東れゆゑ
さめてとういひしひとことうへよるおつるとや
かいぬへんをしつこてなぐりもいりでようら
むなぐくちずさひぬへり人めして給ひ出
るとぶまこつけてしがれ。なほいかるることをと
かしきこまはしうおぼせ日こけてぞもてとれる。
むしさはのこまやかるうこずくようして小がねぞ
例のさてしるこだおなじさ海にかひなさうしを
うきて。いとおしさは。皮ありつるかふこにてなしひ
すさこぬへるをぬすこうとて中にひきやりて
いれうりぬれこまてぐりとおぼすぐりのうれし

さぞいと人まろうりけるそこもうとあくうさ之雨
へるをこゝろ（やりたち又ゑれさ）ぐけのへれば
（荻葉）朝夕まなく○をこゝろをの山にこゝろぬ泪や
をとるしの時とや（タム）とりあすべうしん。あうことあるぐ
もれしましげまうさこゝぐりのへる。れくもなすぐこゝ
あり。人のうへなどまて。やうのすさ心をひいしうしも。
もどうしうまけし心なしぬことまこゝさくし
うど。月のうへまてはげまいとこゝえがくうるべき
けぎなりうりおやしやおなどうしもをあしんと
しうへしこまへどこゝしもうるはず。六（ほん）条院にも
きこしりて。いとあ（タノ）とあしううろげ紙おもひ

しげめ人のそしつまぐ和なくめやすくてなし給をおも
ぐさしうまがいりしへすうしあざれだえおぐなる
名をとり給しおもておこしまうれしうおぼし
まうるをいとおしういづるまもころぐるしさ
ことれあるべきことさしそなれうるなりしひまて
ぐるおしでおとぐなどもいくまも給へんさぞうりの
ことさどしぬまはあしじすくをといふものゝがれ
まびぬるなりやどもうくもくちいるべきことなる
ずとそまて女のゝあれこゝそいづるまもいと
おしそれとおいなくさこしめしなげくけ
さ給のうへまもさしうるけさ給のことおぼし

いでつくうやうのこゝろしをさくりつけても
ありしんのちうしろめたうしひきゆるさ海を
のゆへば(法)かうちあらめてこゝろうくさまで
とくしりしめべきまやとしたり女ぢりまを
もてあすさ海も一わきうあられるべきもれはなし
抱の衰ありおしきことをもこしらぬさ海にひさ
いりしづこなどすればおまくつけてゝまゝふるもん
ぞへしさもつれなき世のつれぐをもなぐさむ
べきぞはおほかたものゝ心をしらずいふかひなき
抱にあらひたんもおしこそかんおやもいと
くちおしうべき抱にはあらずやこゝろうりのこ

こめて、無云（むごんさいし）老子とうほうしだられなるしさとる
すうむうしのことひのやうにおしきことよさと
せしひしりなどしうげもれなんもいふひなしまが
こころなどしもよきほまはいでこもつべきぞと、
そしめぐしすも、今はこゝ女一（略名花ノ法子）の家のれこめなり
大（タ）ねの君まりぬへるついでまて、忘れへん気色も
ゆ（ほ）しなれば、汨（汨）やまぶのいこまてぬらんな、さのふ
なふとしふほまこそとせよりあるのとしなる
せまこそあれ、衣にはぢさなしや、夕（ゆうべ）の事のうしな
程のむきぼりよいつでこれうこそりてよろげそむ
きすてんとしふ法、さものどやうなるやうまても

すぐすれ、いとワろさワぎ女やとのゐふ。夕詞まことに
おしげなるさひとぶる。なれがぞしもはなれうこく。
もふ世まことに侍めれなど罪て、こやまどころの
四十九日のワぎなど、やまとれうこなりがし乃
あそん、ひとりあつひ侍り。いと(係詞)あはれなりまぎ
なりや。夕詞もかぐもさよすがなさひとハいけり世の
かぎりにて、かゝる世のもてこそなしう侍れと
きてゐふ。院(係詞朱)よりもとふらひをゐらん。かれみこ(後兼)
いかにもひなげさゐつらん。もやうきしよりハ。
このちうき年ごろ、ことにふれてきくこゝろ。この
更衣(後兼母)こそ、くちおしうぞめやすきへのうち女なれ。

おほかたの世まつけておしきけぎなりやさてもち
ぬべき人のかうきをゆくを。侍(朱)もいうじうおどろさ
笑しかりかれ(夜葉)こゝこそはこゝまもれし給入
道(女三)の文よりさしつきまはらうたう志給(朱ノ)かれ。人
ざ面もよくおかすべしとの給。此(ケノ詞)こゝろ(夜葉ノ事)もいぶもの
し給ふん。こやまどころもこともなりし人の
けはひ心ぞをまなん。志たしうおとけ給はざりし
かどぐ。ちうなきことれつゝでまなれづらひとれ
よういもあらはなる抱まなん給ひきてめて。文(夜葉)の
此こともかけずいとつれなし。(深ム)かぞ(ケイ)りのすくよけ
ごろに。ぞひそめてんこといさめんまうなけど。

もちねざらん抱うしまれさうしうしといでんも
あいちしとおぼしてやこぬ。夕地かくて此ほうじも
よろげとりもちてをさせおふことのさてをの
づしうくれちければ。以ほ愛ちなどまもこさゝおてさ
やいあるべきなど。女がたのこゝろあさゝやうなり。
おぼしちすぞつりちさや。かれ昔の此心あれど。
以ノ子達
えぞちもまでとふしひ給ひ。ど謹ちなど。以愛ちりもいか
めしうをさせおふ。これかれもさ海ぐをとらしぞ
志おへれば。時の人のかやうのまぎまをとらしぞなん
ありける。三宝やいかくてすこもてなんとえしこゝろ
こゝをかれど。朱院ま人のもしそうしかれば。詞ひと

あるまじきことなり。げにあまるとき海うぎ海に。
身をもてなしぬべきことにもあらず。どうしろし
なき人なんなかくさろさ海にて。あるまじき名紙
たち。つゝえがうしきとき。これ世後の世なるぞに
もどうしきとがをふにぎなる。そくにかくよう紙捨
たるに。三家のおなじごと身をやかしたまへる。
すゑなきやうに人のせひいふもすてたる身にも
なやむべきにはあらず。どうなしぞさしもやうの
ぬとおしそひ給りんもうたてあるべし。せのうきに
つけていとふい中に人にろきけぎなり。心とせひ
たるなまて。今すうしもしづめ。そろすましして

こそ。ともかくもまことびく男しなのひとり。このさ
これなりひらぞ。ふかしめしこゝろべきぞ。さやうのことの
さらずなりまつけてかうむじのへるとつみれる庵
かんこと後なりひらのありさりとて文あらはれて
まれし給ひんも。おほくさう心づきなきことく
なりしなりひらぞしとなりひらさんもいとをしき后。
給ふは後さへたてあそびさんと思してちん。この
すぢはかけてもさてこし給はざりけり。大将もさらく
いひなしつるも。今はおいなりしかれなるよしゆるし
給ひんことにしげなありて。すぎこしのこゝろよう
あらそひとへまはまつるもんといふかぎはさんなるきへ

すらしめきさとがいおもきて。いつゐそめしことぶ
ともなくまぎらりしてん。さしがへりてけさしぶち。
なうぶをのうしうくづらりんも。いとうねくし
りなべしとしなて。一比象はつくりなべき日。その日
どうりとさぶめて。やまとれかゝめして。おるべき
さほうのゝまひ。一条ノ三やのうちりしひしつゝひ。さしそ
いへども。女どちは草しげうすゝなしなへりしを。
ミがきゝるやうはしつゝひなして。此心げかひなど
おるべきさほうめでゝうかべしろ。此屏風。木丁
おましなどまで。芝しうりつゝ。やまとれかゝり
の給て。かれ氣までいそぎつゝまつゝをなふ。その

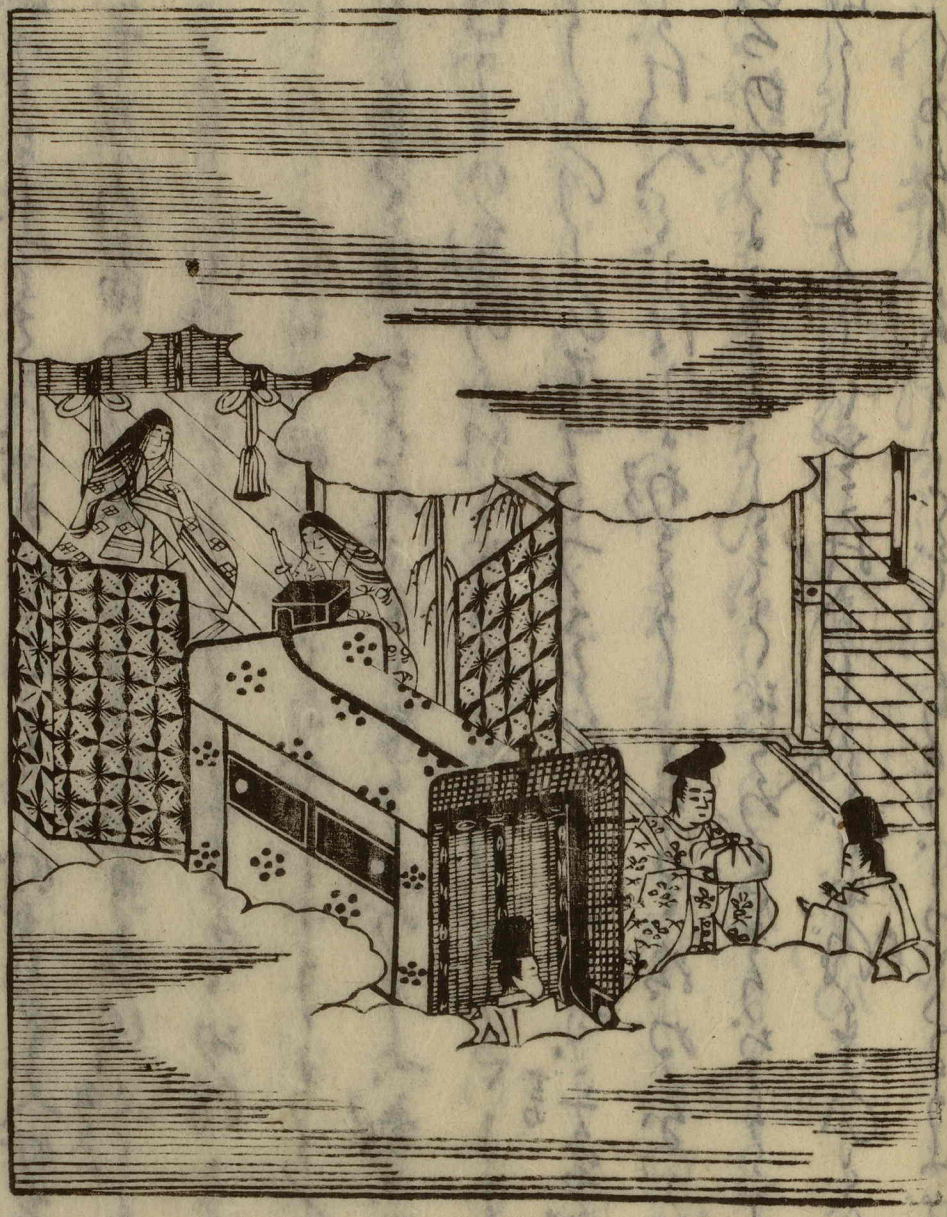
日は夕くれかゝりぬれば車ども あまた出されたり。こやも（旅装）
さるはつゝしどおぼしの給はんとつゝじ家ん。
やまとみちとも。（大和守行）さしまうけ給りしど。ころあはせそく
あはしきれなる経をこゝにまりあげき。このほどみこや
づへはこふりはまちかひてつくりもけちみえ。つまは
（大和国）くまのこやもやもいまり。あらずめべし。こやのうらの
ことゝもこゝの人ゆづるべき人もやらず。いでぬいく
しう。かはとこゝのふみをそ。うよまりけるおはし
いとちむすげ。にみえてまつでそのあかりまえ。
かまずしもおりしまずまじきれおもひさ給か
れば。さしそへくるしへもれ。心にうつしめ

おほくゆれ。ひとところやハ世れもどきをもおもせ
ゆべきいとおさなくおもしますことなり。こけう
おぼすとも。女のれころひとつに。けがれ身をとり
しらくめ。かへりこゆべきやうかあらん。なほひと乃
わがめしづきゆへんりしすけられてこそ。
かうきれ心のしこきれをきてもそれにかく。
べき抱なれ。玄ぐちのきてしたしをなり給ひぬなり。
女房達を云
かけハさうまじきことをもれころどもに川うう
まつりそめなてといひつづけて。左を。かねをきむ。
さこ 二人を落葉ノ女ぐう
おつまりてきてしらふるにいとまりなくあざ
やかなるれぞども。人ごのなりかへさすらも。我ことも
落葉ム

あらず。れいとひとつかはそぎすてまほしうおぼ
さるゝ。ばかりをかき出てこゝまへぞ。六尺（しゃく）だかり
にて。すゝしはそりこれど。人をうるまにもこまらず。
こづかしのれころにはいうじのおとろへや。人り
こゝへきまほにもあらず。さ面ぐに心うき身をと
おぼしつゞけて。又かし給ぬ。時（人の行）ぞひぬ。夜もふけ
ぬべしとこれさらぐ。時ゐいと心あはてしまう吹
まがひ。（彦星）ころげにまれがるしかれど
（彦星）のぼりにし雲のかゝりにこちまじるもいぬ
かゝるなびかずまがれ。（地）ころひとけにはけらく
おぼさど。そのころへれもまゝちまどやうの地い。これ

とりかくして、人ごのまゐり寄しかれば、かくもて
さはがざらんよごまおまのおしげあるまてかを
てがましう、けかくしきやうまはひきまげん、ひと
きてもうてあげずまじかべきけぎをとあげきば、
此まほいのことも志給ひず、人ごはこれいそぎこちて、
とのくらしてだこかしひつよろづのまれをもちかぐ
しかねかくろやうのまれなれど、これさ記ごてて
ちしびこれば、ひとりとまりぬべうまあらで、なく
なくれ車まのりぬふ抱かしかくかしのこまもこれ
ぬて、こちけたり給しとき、れこちのかるしき
まもれぞしかきなでつくろひ、おろしなり給しを

おぼし出りまゝめもきりていうじ候ちしまそへて
種ぐらゝ紙そへたりが候りたはしもちゐれるべ
[illegible]
無しされなぐさめがたきかたまて明り
くもり玉のもてかれ（地）くろきもまぐちあへさせ海
かずかれ（[illegible]）もなしまへりしらてんのもてなり
なりず種まをさせ給しをかたまとじめまへり
なりなりうし海のてがうちなん



茂葉一条ノ天 地

なりしまし つきこれば、茂のうちなるしげもなく、人げなほ
えて、おしぬさ海なり。此車よきてなりぬふ伝。茂葉ハ さしま
ふる里となりほえぞ。うとましうこそてなほさる
れば、どこよもなり給ひず。いとあやしうもうく
しきかき海かなと、人どもこまりつづしふ。茂ハ ひ
むじの基のこれこなりてを、つがれかくまり
りしひて、すこつきがひなりなり寸。三条茂
ハ、人どハはうまあきましうなる給ぬなかれ。
いろの行まましことぞとおどろきなりなるこ
なりしだめることとこれましうぞなほしひとは。
うくゆくりなることぞうちまじまくまふげ。

されど年へにけること紙をとなくかしきを
もしさですぐし給けるなりとのゝ。おもひなして。
く女(彦素)のれころゆるひ給ひぬとしひよる人もなし。
とてもなくても家(彦素)のれこあそいとおしけれれ
まうけなどさ御うちりて。ものゝちじめゆゝしげ
なれど。抱まいしをなど。これしづまりぬるに。つゝる(タノ)
ゆてかれの君をいゝじうを先のふれ(かれ付)こころさし
まことになるがうおぼされど。かふあ寸をすぐして
すしさをの人。中くこちらへりて抱えしたげこそ。
なさ人のやうにてなん小させ給ぬるこしら人こそ
ゆるともつくしとのゝおぼされこれどもなるにども

月のゝあしそ給れ。いとまづしもしうきそしさせ
まくちんといふ。いと（夕詞）あやしうをしたり罪し
きをしまけたがひて。いとけなくころえがたきれて
ころまこそありかれとて。しひよれるさ海。人のれ
さあもつがたあも。せれもどきあるまじうの給つゞ
くれば。いで（かわ詞）やたゞ今は。まるいたづしゝべりこなし
すなべきまやと。おけたくしきみだり心ちまよろづ
しあへつれず。おが（夕をなし）志とくをしたちて。ひたふる
なれころなつかしを給そとるをする。いと（夕詞）まぶ志
らぬよれ。まくあざ海しと。人よるをけるそし
おとすらん。月しそいうじられ。いつでひとまもこと

りこきんじゆんなるしと思ひてののへだ。かくとし
かま。りとおもうもあり。まぐゞぬにげまげうぬ
此心がまへのけまこそもと。ことりにげま。何事ま
みはまろ人なんとすきしうちワきひぬ。
く心ざはなれど。つまはきれぬべきえなきれぬだ。
やぞこの人をひきそそぞしらりまうりのふ。
まめいりと心うくおもけなくおもいけき人の心なり
ありとわくつきれば。ワくおもやうなはりひ
さぐゞともと思ひてめりごめしま。おもしひとう
ちつせのそ。うちまりさきてなほとみごまりまるり。
これもいつまでまつは。がこうまえぐれころまる

人のころどもはいとかなしう口おしうおぼせ
おとこだ(タん)はめざ夜しうつくしとせひ思ひまへど
うぢうりまてはおまのまてもなすことかはとのど
りまそして。よろづにせひあしのふ山ぢりの
こちぞし給けるからうして明がたりなりぬ
くてのことくいへば。ひるおまてなるべかれど
出のふとて。こゝいさくれひまとゞまといこじう
きこしのへど。いとつれなし(落葉ノ)

うしこまびむ日あ紀がうき冬のあまるさし
まさる関の岩りど。さてしんかるなきれこころなり
なりとなくく出給。六条院まぞかりしてやまひ

始ひんがしのうへ一条の家にうしなりの人を
ことゝかれ大夫にうりなどは字ゆるいかなる事れ
ことまかはといとおほとうまのるまふこうせて
此事そへこれどそばより御のうまはな紙こえ
こそまつりのふさやうまもな紙人のいひなしつ
べきことは侍りこ家せ前にいとこころづようある
まじきさ海にいひたるち始しかどかざりの
さ海にれこちれよたりけるに又こゆげるべき
人のなきやうなしかりけんなるこん後のうしろこ
まとやうなることれ侍しかばまとよりの心ざしも
侍しことまてかくさ海へなりぬるとさ海ぐいる

人あつかひ侍らんかしさしもあるまじきことをも
おやしうへこそ抱いひさがるき抱まあれとうち
まほひつゝ。れさうじこるんお紙せうへじと
かうせうちておまはなりなんとおもひむせ
ぼくまゐふめればなまかはこるるかるるまきて
まくも侍るべき紙さやうまそんぎもなれても
まるれゆいぞんいたがへじとせゐへて。こゝかく
いひあつかひ侍るなり。院のわたしせゐへんまを
ことのつゐで侍らばかうやうまもひ罪しさせ
ゐへおりくて心づきなきそろつふとおぼし
の給へんとこゝかり侍つれど。げまかやうのすぢ

まことに人のつらさも、こゝしのこゝろにも尽る
ぞかめやうに侍れども、のびやうにあふ人〳〵乃
いはくりやくせ侍つると申こゝにさうやうある
風氣もまことにはされまれつるのことなれど、三条の
姫君のおほせんことにていとおしうれのかやうに
あはひなりてこと思しなへし、らうけまものなへ
あすひめざまされ、いともうく給りされものゝ給
とそおほそくまれとも、とりうにまそあし侍らん。
うしこまれど、はおりさ申ども、まそもせしらうせ
出へおぼしかゝんのまことに人いつるのことには
給めれ、さばるくことがましこともしけずしもちゝ申

むつしうまづらしきやうにはまじかうる
ことあれどそれましもしるがひしつまじきわざ
なれどことれこぶれ出きぬるのち我も人もよく
げにあきたしやる我こゝろのなどの此心もちゐ
してさ海ぐにありがたう。さてこれ此うるの此
心などしてはめでたきものにはこゝ生りしてゐぬれ
など。ほめきたしの人は[紀ちる]ひまて[何]もれてゐしに
ひきいでのふほどに。男の人はつきなげしこそ
あらはれぬべう。さてありしことは[係]僕のこづらの
此ろをとは人しらぬやうにいさゝかあざくしき
此こゝろづかひをぞ。ぶいじとなげひて。いましめ

と給ふ。しりうごとまも事し給めりこそざりしぞう
人のなのがうへしらぬやうに見し給れとのぬへぞ。
さるん（夕汁）つ〇これ（[illegible]）ちなしもいまし先おほを
らるゝ。さらはかしこきかなしへなしでもいと
よくおさめて給る心をとてげ（地）ほおしとゝぬへり。
おまへ（淳ノ）に来り（タノ）ぬへれば（淳ム）かれことまゝ（[illegible]）しめし
これどおまうはさくがなまもとおぼいてぶうち
まもりぬへるにいとめでたくきうしこれご
ろこそわびまさりぬへるかさりなめれざるさ海の
すきごと給し給とも人のもどくべきさ海もし給
つぞ。鬼神もつゝゆるしのべくおぼやうりもれ

きよげまづうさうまゐひとちしゐへり拙
しひしぬつうどれほどまゐるおつをずかくは
ちうこしろちうねびとくのほりこまへるこゝりゞ
ぞうしゐまてちどうめでざらんかゞこゝ候まても
ちどうをぞうざらんと我ゆゑちがうもおぼしを日
は
こけて三条殿まはつうゐへりいり給よりづゑこち
すぎくうけうしげまてまつりれあそびこまふ
女ゑ丁のうちまつしゐへりへ[タソ]こまへれどめを
こあまを給ずづ[ケム]こまこそいあれとこ給も
こゝりちれどぞうりがかまもまてちし給ず
ゆぞとひきやまゐへれバいけ[十五内ヶ月]こゝとておりしつゝぞ

まろいたやうしまきづれはとまとのみへばおなじ
くはなりたてなんとてとのみふ（夕行）心こそとまより
けまもおかすれさ夜はよゝげもなければえうとゝ
もつまじとおなまごろもなりいひなし給ひ心
やましうてめで（行）こそさ夜になまめいみへん
おたりにおりふべき月にもあらしいづちもく
うきなんとすなほくごとなきし出そおいなく
年代をへけるごとくやしき地をとておきあがり
みへるさ夜はいうじしおいぎやうつきてにほひ
やうに打あるみへるかいとおしげなりかく（夕行）
こころおきなげにもうごちなしこまへればにや

めるれてこのとまこそいまはあそろしくもあしず
女まこれがうしくしきけ紙そへだやとさいぶれは
いひなしのへがなまどゆふぞおいしうまし
ま給ねぎろもしなんこれがよくしきけどおい
ぎやうなしこすそくしなんはうしろめたしと
のこまふるいと(タム)おしきき海のこまされば三海
やうはひしのてちくこそこ給はざしめよてまは
などうきくこ海はざしん さてもちぎりふくなる
を紙しきしをんのれころちるまはかまうちつぐ
べうなりよみぢのいそぎはさしそはちぎりきそ
しうとい(比)とつれなくいひてなまくれとこしらん

ふるくしなづきのめの人がいつしけりやうたふふうのみ（書肉ノ於）
くしらうくるき心もくおのみする人なれば なとどさら
ごくく哥ちずしりなき代づくしちずくくつまめし
哥をさいひ（ヰム）義と申ば年抱うし心のうちてうれもいと（後葉）
まがふろそくそくづうろもみくちきへのけひ
まはえし哥のだまいしあ紙はいちしぬことまそく
おほかたなどもしひなり哥なれざいこゞまゝしうるも
あべいふまじさうなるきざしいとゞしくまうじうた
あはれくなき心ちして善りまくまがみあも
きえ入りぬるなきさうとなしてごろるらうりて
いそぎうなかめてし哥（雲の）晩日のまつりも案らざり

けうまれいさゝか美りちどしておかず。青(夕詞)より此
ことあるに心ざしのとろかるゝざりしさ海。おとゞの
つゝくもてなし給しに世中のしれがましき
名をとりしうどゝ人がたきをねんぜて。寔し
こすゝこ氣色ぞうしあたりをあまたきくすぐしこ
る程にぞゝさしもあらじとなん人もまどきし。
今しふまもいでうはさるかんとゞがうろちながら。
いましへゞまをもかりかりとしたらくをいまは
うくまくこのふともおぼしすつまじき人ぞいと
所を記までかずそふめれば此うろひとゝにまて
しなれのべくもあらず又よしこのへやゝのちこそ

きぶめなるき世なれとて、うちなき給ことも有。女も
むかしのことに出のふに、哀にもありがたかりし
此中のさすがに契(ちぎり)ふかくつけかれと、おもひ出
のふ、なよびこゝろ此ぞどもぬぎのつて、うちつと
なりをとりかきねて、ふさしめのひめでこうつく
ろひけさうじて出のふに、泪(雲ぬん)かげにいぐして、
志のびがたくなるぶの出られば、ぬぎ(タノ)とめこまへる
ひとへの袖をひきよせて
なるゝ(雲ぬ)力をうしろんよりは松鳴(音)の所まれ哀に
こちやうへまし、おぼ(河)うつしびとにてはえすぐす
まじかりそりとひとりごとにのこまふに、こち

とまりて、さも心うきはこころかれ

まろし夜の何まれぬれぎぬなれぬとてぬぎ

人のてふ名をたてめやはうちいそぎて、いとちかく

ちかしやうしろまはちかくさしこもりあへるを

ひとぐうくてのこやはけかくしうかしりぬ

罪も行ぬべきを、例の此事程にてあるべきことに

こそきこえ給ひめるどよろげに罪しかれば、さも

あることにはあげしちがしいまより後よその罪

とも我此心のすぎにしうるをもこころづきなく

うしめしかりけり人のゆかりとあげしまりてその

事もしらめし給ひずこはかれまくしまうづらる

ありと思しけるに。給人もいとおしと見奉る。いさく（落葉ノ君ら）（おほ殿）
かも人心ぢかすかりおもんにはわかれ給はず。ともを
かうも思ひしん。これにかくのほどに二すぢにこひ
こゝろこゝとなくてぞ、ますますさんとなん。ふるく
おぼしの給はすぞうく。いとあやまくはきらぬ
人なくこかりぬめるをちなしぢうつ給はにて思ひ
まふところも。（夕霧）むこころいひことぞ夜はらちかやすき
御をむくずちなりける世られとおちなげきて。何の
やうにておほしまさば。さればこしなどまでもむべきこと
ならり思して、われ心やかなへるまもあしずおほかくの。
ちし月ともすべしけべくなんなどつきも空ず

わかしゆ人〻どもおもふ落書かくこそはれてまいりぬるさ
れこそあんじつゞけたる人のこゝろおもはんとく
おもひげにちかひめぐりあひけれどもさむへきさま
まことにすこしそれこゝろに心がまへあるとなる
いかなることしもうへをしりつけたりけるのこゝろもちて
かなりぎりとそくのこゝやはひとれこくもしさん
ことものとかりともしよろこびの人めもあはせ
かなしみちくのれ心づくひをこれのかよひあり
うちのてもおばしいちもけなんとげぬる様
のりとうてておかまくからてにさしてずれ
人のれるいやぶしいつと知しりたる人のこゝろはひとへり

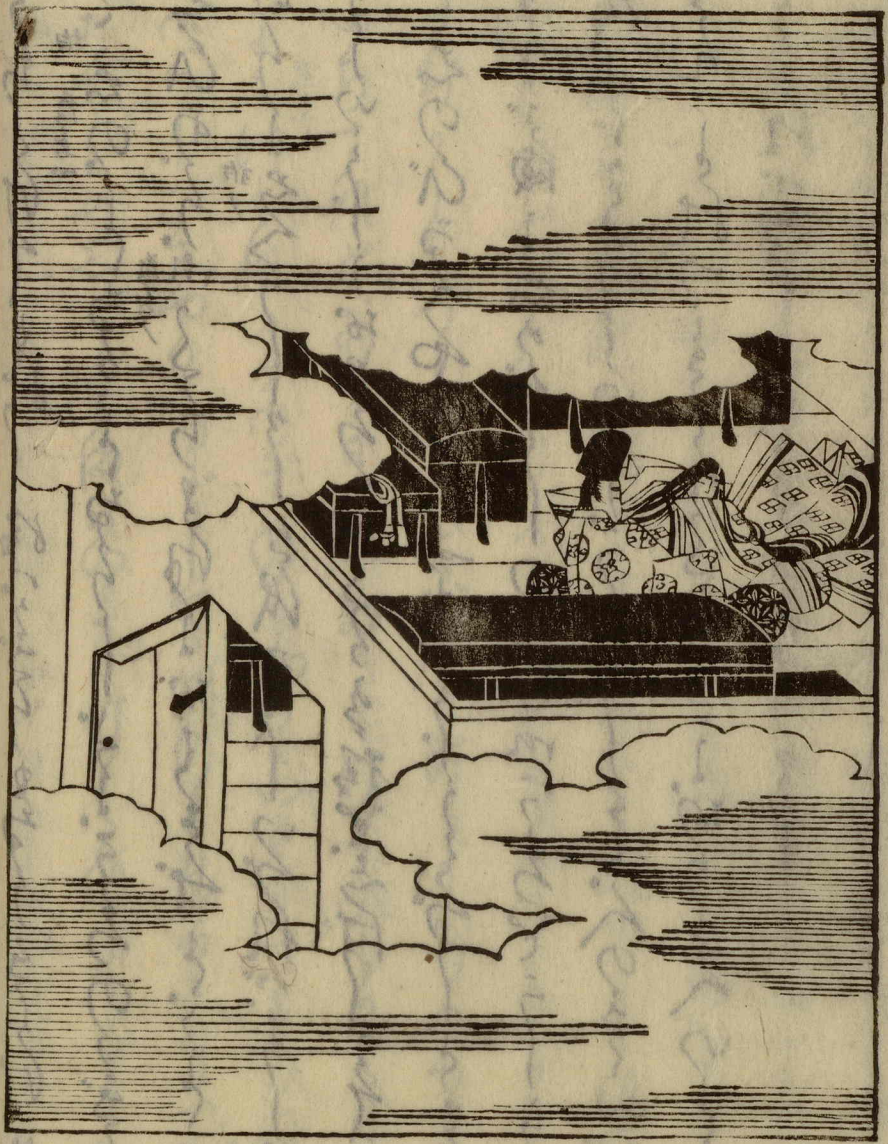
拘を覚して、おさまげなるこそいとおしけれなど。
これ人（かね）をもめぬへだ、げ（ん）にとしひこなるも。今は
心ぐるしうかたじけなうおぼゆるさ夜なれば、人
うよりしのふめりごめれ。おのくちらりいれ（タと）なりて
ぐり。いこじ（茲基ん）うあさましうつくしと。さふこふひと
ともげにうる世の人の心なれば、これらりまさる
めをもこきけべうりかりと。これもしき人もなく
成えて給ぬる所方を。遠くなるしうおぼすおとこは。
ようげに覚しまるべきことゝりをきてしたるを。
云の葉おほうあられまもおしうも覚えつくし。
なへど。つこく（茲基ん）心づきなしとのこおぼいたり。いと（タ河）

かういはんかたなき物はおぼされかう男のほどは
こぐひなうちづしかれがおうちじきろろのつき
そめかんも心ちなくかやしうおぼし給れどもり
かへす物なしぬうちはおまれこけきれ名まかは
あしんいふひなく笑しまかれもふまかれもぬ
とき男をちぐうこめしも給うなうをこぐうう心
ざしをふうきふちはなずしへのてすてつう男と
おぼしなせときてのふひ（落葉）とへのかぞをひき
くしてこけきことは孫氏なき給さ海の
ころふくいとおしかれどいと（夕詞）こうそいう
なれがいとかうおぼすしんいこじうもふくも

みえけるにかりぬれば。それぞしゆかるふれしきも
あるをいふ本よりけるにかなびきぐさは誤らなりて。
よしなどゝふやうおもなるに。さやかずすんと
ぞひようにおありなれば心うくそ。二条の后のむ
のふんとと。いうしへもなすゞろまなうおひ思
ひそしふりしるれこと。後代にかいとうしるすき
と侍ようちとも。とけるまへる侍をものひかるも。
わが心もそいとあぢきなうそつゞけしるれば。おのれ。
がちよもそしらへ筆給はず。ちげさあり給川。
よりのこふれがたうしくて。世いろんもおやしそれば。
なふとまりてそころのどかなおなすうくさんひるぬ

かゝるなるをおさましとこゝやはあばひていかゝく
うとき此事文のまさるをどこがましき此心うれと
かけいつしき抱うしあはれなりぬりごめもことな
こ夜なるまれあはうまあらでかうれ此うしひつゝ
けしなどだらりおろいこなるなるこゝきよきて
やぢかうしつゝひてぞおかしけるうちいくしき
心ちすれどおさ日さし出たるけもひまりさるる
ようけまれたる此ぞひきやすいとうそこぞれたる
此ぐしうきやすなどして此のこまるまふいと
あてよ女志うな夜めつるけもひしこまへり
おとこれ此さ夜いうりしぐちこまへる時よりも

うちとけてもれし給はかぎりもあらはきまげや
こ[拍]君のことなりことなりしごとこころのかぎり
しひあげり此[拍]かたちまほまおもきずとこと乃
おりまし[拍ノ]へりしきに見しいづれがましてて
うういうじうおもろへまろうを相せしげしても
こしのびなんやとしふもいうじうもづしとき面
りうぎ面にしめづしつくづ此こころをこしらへ
給こどうはしいうこともしこも人のさくおぼ
さんことれつこさんうなきにおりさへいと心
うれがちぐさめがたきなりなる



れてうづれりもなど、別のおましのるゝまれり、色こと
なるれしつゝひもい面くしさやうなれば、ひんがし
おもてハ座風をとてゝ、もやのきゝまううぞ、ゑん乃
れ事などことくしさやうにうえぬ、ぢんしき
よういなどやうのをとてゝ、うろぐへまてしつゝひ
たりやまとれかゝのしまぎ女々り、人ごもあざやゝ
なしぬいろのやまづきかいつりうなきぬ、なをとび
など紙こうへさをうすいろのもあをうちぞなど
をさくまぎらりしてれぞいしまいり、女ごころにて、
しどけなくよろげのことなしひこうなのうちに、
まさ面こころとゞめて、まげかなるしもべをもいひ

とこのへごの人（大聖）ひとりのミあつかひをこなふかく
おぼしぬやんごとなきまからうとれおりすりときこえて
もとつとめざりけりけいしなどうちつけに来りて
まぐろなどいふかるまさつしひていとなミなり
うくをめてもこなれがかつらりぬふほど三条（宝ぬん）殿が
ぎりなめりとさしもやもとこそかけいこれミ
ノれまめ人のうろうちろいなぐりなくなんと
きくしハ海となりなりと世をこころミもつ
ぬちしていつき海にしてこれなめげきをこじと
見しかれバおほ（ほ）とのへ方ぐんとてけり
海にけりを女（こんぎん）れの此里におもしすりほどなどに

絵にけるを女れの此里におもしすぐるほどなどに

多いめしなて、すこし拘たひはるけ前におぼされて
れいのやうにもいそぎけるり給ひず、大将(タイ)殿もいそ
なて、されぞよいとさうにもれし給ひぞちり、この
おとゞもちこおとなくしうのどめこるところ
さすがにちくいとひきぎりに、菓やいのへる人ぐ
まてめざ面し、こゝにきうじちとひかく、先きさ
ことぞ志いで給ひべきことにおぼろれなて、三条殿(宮ゐの方之也)に
けるりなへれば、君ごちもうへきともりなへれば、
姫君こちさていとおさちきとをぞなており
まけるこつけて(クナゼ)よろこびむつれおるハうへ(宮ゐ)を思ひて
きつりてうれへちきを給を心(クム)ぐるしとおぼせ

きうそこゝろびく罪して、ひとへにまれさまへど、
此世(書ノ)りごとにしかくかくしうかぐ
しれよやとも此きう思しめへどおとゞのこゝさ
給ひん取もあれば、くくしてこゝづくし集りめへり、
志ん殿(書ノ)にあんおりするとて、例のひとり給ひくゝは
ごごちのこさふくふ、ひゝ君こちぞめれとにそひて、
おりしけるいまさらにひゝくしのれまじらひ
や、くゝ人をこゝかしこゝにおとしをきめて、
あどしん殿(女此ニてさでんと)のれまじらひはふきけしうしぬ此(書ノ)こゝ
ろのすぢとは、ごしにしまされどさるへきにや、
むかしより心にもあれがこうしこゝてて今はかく

かぶくしき人のかぶくあれなりをかこゝ
ミすけべとゝやまとゝれミきてけるちゝ一
かしまかうもまてあしのかべくやとゝいこじう
あぢめうしミ中のへバちゝごともいまはとこゝ何き
給まけり方ちれバ今もこちをうべきさまもあらぬを
何かはとておやしきひとくハおぼしすてずハ
うれしうそハあらめと思しのへりちゝぐしかれ
此いらへやいひもていけぞしあが名ゝ知しきまして
しあてけるりのへともなくてぞれ思ハひとり
かしのへりおやしうちゝぞちゝ比れとしひ
つゝ言ぶちをまへるかをのてかしこままいかま

おぼしえだちんさ海。さひやを冥しやまてうしぬ
こころげらしなればいかなる人。がうやうなることも
おしうおぼゆらんなど。抱こうしぬべうおぼし
ゆふ。明ぬれば人(夕付)のこゝろんもつかくしき後。
(言ゆり)うざりとの給(まひ)もてばさて心えんがしこなる人(重しなす)ども。
らうたげにこひ。ゑゑ。ゆめりしを。えりのこし
ゆへるやうあらんとはこゝろがしも。さひ捨がたこさ後。
ともかくももてなし侍なんとをどしきこえ
ゆへば。すかくしき此(夕ノ)こころまてこの君ぞちを
さへや。志しぬ所にねてつたし給はんとあやうし
娘(夕ノ)君をいざ(付)ゆへかしどなりにかく来りくることも

もしこちはけれバつねまもまいりうじ。[三条]うしろまを
人ぐのうつ。さき紙おなじ所にてぐまこまらんと
きこゝ給。まぐ[ん]いとゝいろけなくおしげにておりす。
いとあはれとこまりまて。母[詞]君[雲の]のれをしへにな
うなひ給そいとこゝろうくしひとうくゝなるさ心
あるはいとあしきまぎなりといひしらをまりまふ。
おとゞうゝこゝ紙事まて。人[詞]けられなるやうに
そしなげくしばしはさてもこ給ひでどのづら
しふところまれをこゝろしん抽紙。女のうくひきぐま
なるもかへりていうくおぼゆるけざなりよしく
いひそめけとなしばなるはおれてふとしも

人(柏ノ方)りぬふをのづから人(落葉)のりしきこころおもへすれこ
えおんとの給ひきてこのこや(落葉一之)まづら人のかね(柏ノ方)乃
君を此使(こ)にてなりぬふ
ちぎりあれや君(は)ぞこゝろまとゞめをきて哀
とおもひこしめしとさくおもひ給えぬしもちぐし
とあるれふこ紙かね(柏ノ方)もておりてぞ(地)いりまへぬふ
これこおもてのすれこまづうぐさし出て人ぞ
地きてしよくし(落葉心)宮ハましてまびしと思ひてこ(地)の
きこは(落葉心)中まいとりたちよくめやすきき海にて
のまやうまこまはしていうしへをさ出くろ高色
なり(落葉)(紙人詞)あれまこうこちしてうねくし

かゝぬにさも御らんじゆりさずもやあらんなど
ぢうりぞかすめぬふ御恩しいときてまくて。
詞 これはさしにえかくまじとのたまへば御こころ
ざしもうたてつかくしきやうにをじがきたる
冥さすべきにやいとおつまりて冥さすれば
づうちなきて心御見示こうへおいをましかばいかにこころづき
なしとおぼしなげしもつゝ紙かくい給はましと
ちしぬふにおぼしぶの水ぐきにさ紀ぶつ心ちして。
うきやつも給はず
後集 なにゆへか世にかずなくぬ力ひとつをうし
ともちひかなしとも云くと地のゝ覚しけかまくに。

うきもとぢめ給ひぬやうにてをしつゝえていぐし
給つ。かわ(拍ノ字)は人ごと物語して。時(訂)ぐさふしふにかゝる
ふすのまへはうつぎなるさ心ちし給ひを。今よりは
よすがあり心ちしてつゐに第るべし。かいげ(ゆか)なども
ゆりされぬべきさしぐのしるしあらはれ給ひ心ち
ちかし給ひなど。今(地)しさげをさて出ひぬ。いとぐ
しく心ゆくれ此事也。あくがれまどひ給ふほど。
大殿の(雲ヶ)志は。日ころふりまゝに。おぼしなげくこと
しげし。間(惟光ノ女)給のすけ。かゝることはさくに。これを
よしゝまゝゆりされ物にの給ひなりにかくなかづり
まゝさことも出さまけりをとしてふゝなどは

時ごとてまつれば、きてしたる

内侍 うぶなるは男にしられましられうき氏人乃
ゝあまもぬらす袖かれ、雲ゐ海けやうしといふ人ど
ものゝあれなるほどれけ生ぐにかれもいと
ぐにはおぼしどおぼすかる心ぞつきにける

雲ゐ 人の世れうき氏衣とこしかぶ男にかんん
とはせしざりし氏、とのゝあるをおぼし内侍ん けるまゝと
衣ゝうる、比このむかし此中ごえのほどにはこれ
ないしのゝこそ、人しれぬ事にしひとめぬへりし
うど、ことあらゝあて後はいとゝ海さゝにつれなく
なりまさりぬひつゝさすがに君ぐちはあまるに

此まとり。此れ（書ね）もしるは。右（さ）良（ら）衣。三良衣。四良衣。六良衣
おほいの衣。中の衣。四の衣。五の衣とおもふ。内侍は
三の衣。六の衣。次良衣。五良衣とぞおりしける。すべて
十二人が中に。うへはなうなく。いとおしげにとり
どりにおひ出給ける。内侍どしの衣ぞちもなん。
うちおしうちうちせかどありて。これすぐれ
たりける。三の衣。二良衣は。ひろぐしのおとぐにぞ。
さりつさてうしづきまりぬふ。隙（深）もこなれなて。いと
らしくし給。この此なりしひのこと。いひやな
うるなくとぞ

69038
6AP78